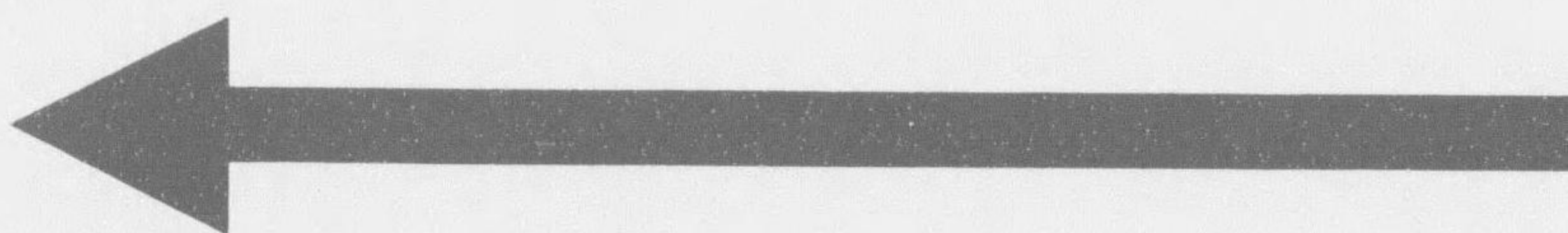
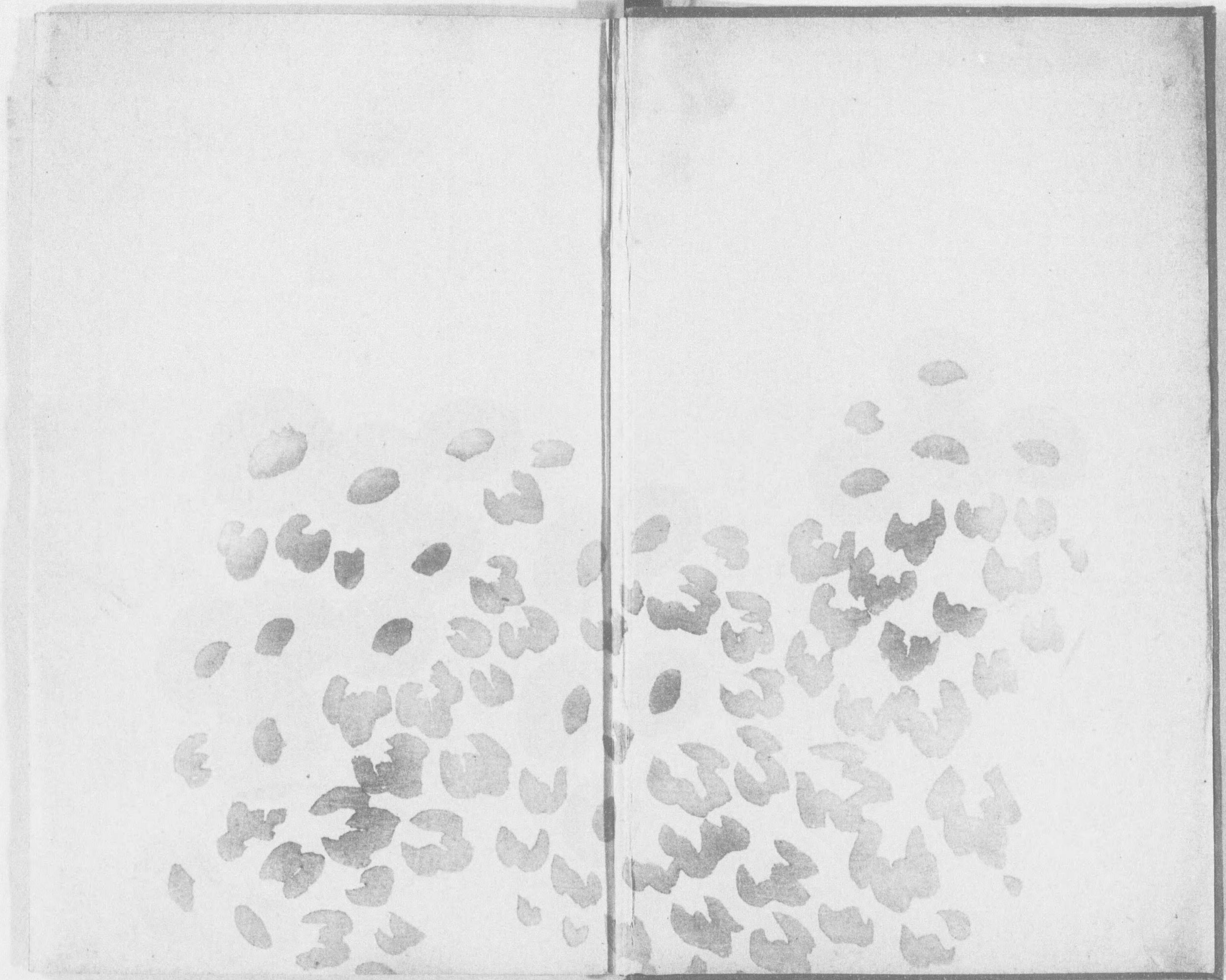


始







金

佐藤紅綠著

大正
8.10.21
内交

特101
351

黄金目次

霞	……	二
三の靈	……	四
落椿	……	二八
別天地	……	一〇一
朝晴	……	一三〇
達磨	……	一三五
睦子	……	二〇一
家庭	……	二八〇
寶石	……	五三三

寒い風が軒の注連を吹くと片側の並木から木の葉が思ひ合せた様に一度にはらくくと散つて其れがさらりと音立て、一尺ばかりの高さに舞ひ上ると直ぐ霜解の大地に煽られて軽いものは四五間も先に走り残るものは波形に片側の杭の邊で吹溜まる。棒杭を繞らしたテニスのコートは家根に遮られた南の日の筋を半分受けて、日當りには少しづつ陽炎が遊んで居る。棒杭を前にした爪先上りの築土の上に小さな構の一軒家、硝子戸に横に牛乳ホールと書いて硝子越に見ゆる柵の上に洋酒やサイダの壇が行列して居る、硝子戸に添ふた右手の格子窓は勝手元で、窓の隙間から今ま豊かな煙がほらくと漏れると、其れが正面に受くる北風に叩かれて右と左へ流れて行く。右は廣場で向ふに並んでる下宿屋の窓々が見下して居る、左は例の硝子戸、其

上に張つた注連と一本斜に突き出した國旗は霎時煙に撫でられたが、再び吹いて来る風に煙は屋根を越えて日向の光に薄らいで行く。いつもは學生の往さ来るさ、どよめき喧騒に賑ふ此の邊も元日は流石に静かで片田舎の様に鶏の聲さへ聞える。

「あら煙くて仕様がないわ」

勝手の竈に火を燻べて、口元から突返されて来る煙に一寸まごつきながら睦子は白い細やかな手で我が眼を擦りながら呟やいた。

「蓋が閉まつてゐるんぢやないの」と奥から母の聲が聞える。

「あら厭だ」と睦子は笑ひ出した、而して火口の下の蓋を開けてもう一度「あら厭だ」と言った。

「それ御覽なさい」と母も笑ふ聲がした。「元日は火を焚かないものだといふのに焚くもんだから」

「でも萬龜さんは手も足も泥だらけになつて歸るんですもの、お湯を湧かして置かなくちや」

「萬龜子は何處へ行たんだい」

「テニスよ」



母は火鉢の前に坐つて耳を欬てた。テニスの音、二二ゼロなどいふ聲が手に取る様に聞えた。「あの装で庭球をしてるのかへ、呆れたね、紋付を着て庭球をするなんて」

「可いわ、御正月だから」

睦子は恚う言つてつ手拭に手を拭きながら店から茶の間に入つて来た。荒い大島の上下に御正月だからといふので梅鼠の紋羽二重の紋付羽織を着て居る、着物と羽織と調和はない處に彼女の溫和しさが見えて、羽織は三四年前のが未だに妹のものともならず用ひられて居るのが解る。其れでも彼女の若さが全身を光らして居た。くつきりと白い肌で、其の白さのために眉も眼も極めて明瞭と引立つ、而して房やかな鬢は首筋や頬を一層明かに見せる。瓜實ではあり何處やらに愁を帯びて居るが、もの言ひの靜かなのと態度の嫺やかさで彼女の青春は十分に飾られて居る。母は娘の顔を睨と見て頭から胸元まで見下したとき靜かに微笑した。一年々々と經つて行けども自分の年を老るのが解らずに只だ娘達の大きくなるのが眼に付く、而して其れと共に得も知れぬ喜悅を感じるものであつた。

「何を笑つてるの御母さん」と睦子は言つた。

「お前今度幾歳になつたの」

「二十三よ御母さん」と睦子は火鉢の鐵瓶を猫板の上に下して兩手を炙りながら言つた。

「まあ二十三かへ」と母は大袈裟に驚いて「すると萬龜ちゃんは？」

「十九よ、厭ねえお母さんは、娘の年を忘れてさ」

「ぢやお母さんは幾歳だか知つてるかへ」と母は仍且笑顔で言つた。

「知らないわ」

「それ御覽なさい」

「だつて娘は母の年を覚えて居なくたつて可い事よ。母といふものは娘の年を覚えて居なければ子に對して濟まないわ」

「まあ勝手な事ばかり言つて、萬龜子もお前もいつまでも子供で仕様がないな」

「怨う言つたものゝ母は何時まで子供じみてゐる娘二人に對しては心の底から満足して居るのであつた。

「早くお嫁に行かなくつちや」

「厭だわお母さん、私一人で行かない事に決めたの」

「なんだつてさ」

「約束したのよ」

「誰と」

「萬龜ちゃん」と

「どんな約束？」

「お母さんと私と萬龜ちゃんと三人一緒の家なら行くつて」

「呆れてしまふよお前達は」と母は噴飯した、而して二人とも自分を思うてくれる志しを嬉し
いと思つた。

二

床の間に天照皇大神宮と書いた掛軸を掛けて兩側に
今上天皇陛下の御肖像を掲げ御供の上

には齒朶の縁に海老の紅る髻長く、白米の白砂にごまめ、勝栗などが散つて居る、二つの燭は長く明るく點つて賑やかな御飾りの中に陰膳を据ゑた小さな寫眞は父の姿である睦子は今ま其の方を見やつた。

「御灯が消えやしないか知ら」

彼女は突と立て寫眞の前に坐つた。什麼いふ理由か母は父の寫眞を見る事が嫌である、一年に一度、元日の朝に陰膳を据ゑるきりであとは佛壇の奥深く藏つて居るので、父の姿を見るのは元日の朝きりである。

幼さい時から睦子は之が疑問であつた。

「何故家に御父様が無いのだらう」

學校の友達にも近所の人達にも御父様があるのに、なぜ私達には御父様が無いのだらう、慙う言て彼女は妹の萬龜子と泣いた事があつた、其れが女學校へ行く様になつてから、御父様は死んだのではない、生きて居るのだ、而も大阪東京の二箇所に店を有て居る商人である事が解つた、油谷國助といふ名は折々新聞にも見える。其れを什麼して私達は一緒になれないのだらう。

彼女は慙う母に訊いた時母は蒼白な顔をして言つた。

「それは今に解ります、もつともつと大きくなつたら」

只た是だけであつた。若し父と母と離縁になつたのなら、自分達も油谷といふ姓を名乗る事が出来ない筈だ、之れには何か仔細があるだらう、其れは子供の訊くべき事ではない違ひない。其れを訊いて母に厭な思ひをさせるよりか黙つて居る方が可いと彼女は思つた。

寫眞の前に坐つてしみじみと父の寫眞を見て居る睦子の姿を見やつて母のお浪は横を向いた。

「お母さん」と睦子は聲を掛けた。「お父様は東京の人？大阪の人？」

「爾ね、大阪の人だらうよ」と母は冷やかに言つた。

「爾？」と睦子は濟まない事をした様な顔で言つた。什麼いふ理由か母は大阪が嫌ひである、日常の話の中でも大阪の事に及ぶと殆ど仇敵の様に悪く言ふのであつた、睦子は其れを思ひ出して黙つてしまつた。

此時入口の戸が靜かに開いて、紫色の羽織がちらりと見えた。

「兄さんが来て居ない事？」

「あらお蝶さん」と睦子は急いで座を立つて「御目出たう」
「御目出たう」とお蝶は急に思ひ出した様に言つて頬を染めた、お下髪に結た前髪を二つに分けて二所にリボンを結び付けた、其の愛くるしい顔は抱付いて頬摺をしてやりたいと睦子は思つた。

「兄さんが来ない事」と蝶子は再び言つた。

「いゝえ、昨日御出になつたきりよ」

「何處へ行つたんでせうね」と言つた時蝶子は鈴の様な眼に涙を充滿に溜めた。

蝶子の兄といふのは早稲田の大学生で森川克巳といへば野球の選手として學生間に名高い男である。毎日の様に此の牛乳ホールへやつて来る。而して此の一家族とは骨肉の様な間柄になつて居る。

「昨夜御歸りにならない事？」と睦子も心配さうに問ひ寄つて「まあ御上りなさいよ」

「えい」蝶子は顔を反向け長袖を弄りながら「何處へ行つたんでせう」

「では今朝まだ御兄さんと御一緒にお雑煮を祝はないの？」

蝶子は微かに首肯した。

「まあ可愛さうに」と母は早や涙ぐむで「睦さん御鯛をお掛け」

「いゝわ、私お雑煮なんか」

袂をくると振つて其儘両手を袂ながらに顔に付ける。

兄一人に妹一人、父もなく母もなく、長年奉公した爺やの世話で百姓家に淋しく暮らして居るのが、大晦日から兄は留守、元日の雑煮も祝はずに心配してるかと思へば睦子は自分も一緒に泣きたい程に思つた。

三

「どうなんでせう、お兄さんはお酒を上るけれども何處かで飲潰れてるといふ事もあるまいし」と母は火鉢の傍に蝶子を坐らして其の手を我が手で温めてやりながら、
「今に歸つて被来しやいますわ」



「でも兄さんは今まで他所へ宿ることがないんですもの」と蝶子は狎へる様に言ふ。

「爾ね」と睦子は嫣然して見せて、

「橋本さんや何かと御一緒だったから屹度橋本さんの下宿へお泊りになつたんでせう」

「爾うだと可いけれども」と蝶子は聊か元氣づいて「爾かも知れないわ」

「髪は御自分でお結になつたの？」と睦子は背後へ廻つてリボンを掛け直してやりながら「本當に髪が澤山あるのに毎日一人で結ふには大變でせうね」

「慣れると何でもないわ」

「お洗濯ものや何か什麼なさるの」

「私がするのよ」

「まあ」と睦子は感心して「お兄さんのでも何でも持つて被來やいね、私がしてあげますから」

「難有う」と蝶子は明るく答へた。

「本當にお豪いわ、萬龜子なんか十九にもなつて自分の足袋も洗へないんだもの、蝶子さんはお幾歳におなりになつたの？」

「まあ」と母は感服して顎を引いた。此の時表の方で大勢の聲で唄を唄ふのが聞えた。睦子と蝶子は中の障子を開けて外を見やつた。庭球は今ま最中と見える。前衛をして居る萬龜子は首尾能く難球を打ち了らせて敵の狼狽する状を見やつた。黒縮緬に種々な南国の花を染めた振袖を着て練錦の丸帯の下紐に前襟を二た所揃んで挿み、緋羽二重に亂れ波の長襦袢の裾も現はに、はあく呼吸苦しさにラケットを振て居る。髪は亂れて後れ毛がはらりと白い額や豊かな頬に掛ると彼は左手に其れを拂ひくした、而して熱火迸る瞳を凝らして敵の手元を覗つて居る。

「本當に綺麗だわ」と蝶子は言つた。

「あゝ綺麗だわね」と姉の睦子は惚れくくと見やつて我れながら妹の美しさに一種の矜持を感じた。

「馬鹿だね、着物も何も堪りやしない」と母は言つた。此時勝負が済んで學生達はわいゝ高聲に笑つた。

睦子と蝶子が元の座へ返つた時表は急に賑はつた。

「やられたく」といふものもあり「腹が減つた」といふものもあり「ばかしくかつた」といふものもあつた、片肌脱や運動服、異様の装の學生に交つて萬龜子が入つて來た。

「お母さん」と彼女は戸口から聲を掛けた。

「森川さんが未だ來ない？」

「あゝまだよ、蝶子さんも訊きに來たのよ」

「あら厭な方ねえ、約束をして置いて」

「恚う言ひながら彼女はラケットの泥を拭き取つて柱に掛けた。

「ラケットなんか什麼でも可いちやないの早く手を御洗ひなさい」と母が言つた。

「あゝ爾々、イツツグロングウヰイ……」と唄ひながら勝手の方へ行く。

「森川君ですか」と一人は言つた。

「彼奴昨夜警察へ引張られたよ」

「警察へ？」と一同は愕然として言つた、「而して什麼した。」

「今に此處へ来るよ、橋本と一緒に」
「どうして警察へ引張られたんだ」と一人が云ふ。
「巡査の鼻を噛つたのだ」と櫻井は答へた。一同わつと笑つた。
「だが什麼して其那事を」と一人は言つた。

四

「諸君！」と櫻井は圓々した日に焼けた顔を起して漸と泥足袋を脱ぎ捨てながら「實に痛快だよ」と言つた。彼は何事にも「痛快」といふ二字を付けるのが癖である。
「其りや實に痛快だ」と彼が再び言つた時一同は着物を着替へ終つて卓子を圍んだ。障子一重を隔て、陸子と蝶子と母が耳を欬て居る。萬龜子は勝手元で手を洗ひ其れから座敷で髪を直し初めた。
「痛快が什麼した」と一人は交つ返した。

「電車に乗つたのだ」と櫻井は言つた。
「誰が」

「森川と橋本と僕がさ、すると電車は満員だ、三人が乗らうとすると待ち兼ねた群集は吾先にと争ふのだから堪らない、老人や女や子供は呼吸も吐けぬ様に揉まれる。と見るとでぶく太つた三十四五の男が車掌臺の上り口の棒に攫まつて前に乗らうとして居る婆さんを突退けやうとして居る。突退けられても婆さんは身體のやり場がない、そこで婆さんは上せかけた片足を引いた、同時に下駄を脱ぎ落した、拾はうとすれば後から押し來る群集に潰されてしまふ、左りとて下駄なしでは困る、此の途方に暮れた婆さんにお構ひなしで大きな男は遮二無二上る拍子に婆さんは群集の中へ倒れた。其の騒ぎが濟むと吾々二人が漸と吊革へぶら下る事が出來た、と僕等の前に七つ許の女の子を伴れた婦人が居る。脊中に一人を負うて居る上に臨月近い大きな腹をしてるんだ」
「能く其那處に氣が付いたね」と一人が言ふ。
「貴様女を孕ました事があるんだらう」

「馬鹿言へ」と櫻井は眞面目になつて「是れからが痛快なんだ、七つになる子供を負うてさ」
「おい什麼して其れが七つだと断定するんだ六つかも知れない或は八つかも……」
「叱ッく」と他の學生が制した。

「處で其の……」

「痛快といふ奴だね」

「うむ其の痛……快……」と櫻井は苦笑して、

「眞面目に聴けよ」

「うむ聴てるよ」

「七つの子供と二歳の子供を伴れた上に腹の大きい女だよ、可いか、子供は人に押されてベソを掻いてるんだ、婦人は吊革に漸と攪まつたもの、背後からは負ふた子が押され、前では腹が押される。即ち腹背皆な敵なんだ」

「巧い〜活辯になれ」

「叱ッ」

「と見ると先刻の大きな男は肩を張り胸を伸ばし兩股を擴けて二人分の席を占領し、加之に氣持快ささうに居眠りして居るんだ、そこで僕は非常に癪に障つたから其の紳士を揺り起した、失禮ですが婦人が困つて居ますから席を譲つてあけて下さいませんか」と憚う言つたのだ」

「嘘を吐け、貴様の事だから痛快に席を譲れと憚う言つたらう」

「いや爾ぢやない、其時は痛快を忘れてしまつた、すると其の男は眼を開いて僕の顔を見たりにやりと笑つて又た睡り初めたんだ、すると橋本は直ぐ洋杖の先で其奴の胸を突いて「おい君にもものを言つてるのに聞えんのか」と言つた、すると其奴は大きな欠伸をしてへ〜と笑つた。と森川の拳骨が其奴の横面へびしやりと參つた。確かにスリーベース位だね」

「痛快！」と二三人は言つた。

「俺の言ふ事を濫用するな」と櫻井は笑つて「其れから其奴を電車から叩き落さうとしたが彼奴却々降りない」

「其の人は屹度大阪の人でせう」とお浪は次の室から聲を掛けた。一同笑ひ出した。

「爾ですよ、東京の人には其那勝手な人はありやしませんよ、私達が電車に乗ても職人ですら

席を譲つてくれますもの」

「小母さん、爾言つてくれるなよ、僕も大阪の人間だよ」と櫻井は言つた。

「貴方は大阪でも特別だ」とお浪が言ふ。一同は又た笑つた。

「ところで諸君」と櫻井は續けた。

「電車の中はごつた返した、僕等三人ばかりぢやない、車中の人は總立ちになつて其の男を撲つた、電車は停まつた。其處へ巡査が來た。これからが益痛快になるのだ」

恚う言つて櫻井は一杯の茶を飲んだ。

五

「何しろ時は大晦日の眞晝だ、處は日本橋だ、電車の中から乗客が悉く溢れ出す、車掌は聲を囁らして制すれども聞かばこそだ、そこで車掌は森川の胸を突き飛ばした、森川は黙つて居ない、不徳漢を懲らしたのに何故僕を突飛ばすかと怒鳴つた。怒鳴られた車掌は面喰つて無茶

苦茶に森川に突蒐つた、乗客と野次馬と車掌はごつちやになつて戦つた。森川は車掌に眼を打たれた。あつと言ふまに車掌が逃げようとした其れを捕まへてぐつと大地に引据ゑた。何しろ眼が見えないから仕方がない、滅茶々に撲る拍子に森川は足を滑らして車掌の上に折重つた。下から車掌が頻に森川をこづき上げた、そこで森川は其奴の鼻を嚙つた」

「鼠の様だね」と誰か言ふ、一同笑つた。

「處が其れは車掌でなかつた、巡査であつたのだ」

「はッくく」と皆は笑ひ轉けた。

「さあ警察署へ來いと巡査は眞赤になつて怒り出した」

「爾だらう鼻を嚙られたら顔が眞赤になるだらう」

「うむ行かう、さあ來い、吾々三人が警察署へ引張られた、何しろ巡査の鼻が唯一の證據だ、諸君も知つてる通り森川の顔と言つたら夏になると黒奴よりも黒い而して彼の齒と言つたら雪よりも白いあの鋭利な齒でやられたんだから堪らない、巡査の顔は一面に紫になつて腫れた。警察へ行つてから署長に説諭を食つた。天下の學生たるものが巡査の鼻を食ふ奴があるかッ」

「は、は、は、は」
「説諭で済んだもの、是から森川式を發揮したんだから痛快だ、俺はあの巡査に濟まないと思ふんだ、あの巡査だつて吾々と同年位だ、學資があるなら學校へ行てるんだ、貧乏だから巡査になつてるんだ、妻子もあるだらう大晦日は什麼して越さうといふ屈託もあるだらう、其れを君、鼻を嚙つて明日から勤務が出来なくしては僕は濟まないから僕は謝罪りに行かう、而して出来るだけの治療費も拂はなきゃならん、慫う言ふのだ、僕と橋本は其れに反對した、元來鼻を嚙られたのは巡査の落度だ、苟くも巡査たるものは自己の鼻を防禦する事が出来ないのは即ち我が身の不覺だ、のみならず爾いふ災難があればこそ政府が月給を拂つてるのだから、君は既に署長に免されたる以上は其の上へ氣を痛める必要がないと論じたけれども聽かない、君等の褻口を皆んな出せと言ふんだ、僕は幸にして五十錢しきやなかつたが、橋本は三圓五十錢ばかりあつた、其の中から電車代を十錢づゝ僕と橋本に渡して森川の奴さつくと行つてしまつた。」
「痛快だね」

「痛快ぢやない、僕は珈琲を飲まふと思つて居た六十錢を只取られたよ」と櫻井は苦笑した。
「森川はそれから何處へ行つた」
「巡査の自宅を訪問したさうだ、裏長屋の酷い家で子供が三人もあるんだ、細君は女學生上りか何かだらうと思ふ」
「それは君の想像か」
「後で森川の話を綜合して見ると爾いふ事になるよ、海老茶色の座蒲團があつたといふから」
「座蒲團と細君と什麼いふ關係があ



るんだ」

「女學生時代の袴を座蒲團にしたのだからと僕は思ふ、その位の事が解らんで文學者になれるか」

「そんな話は止せよ、それから森川は什麼した」と他の一人が言つた。

「うむ、調査は未だ歸つて居ない、そこで森川は細君に向つて實は慙うくいふ次第で僕は君の亭主の鼻を嚙つたと話したら細君は驚いて眼を圓くしたさうだ」

「當り前だね」

「森川は自分の持て居た六圓餘りと橋本と僕のと合計十圓許の金を出して取つてくれと言ふ、細君は良人に聽かなければ取れぬといふ談判の最中に調査が歸つて來た、そして森川の話をつて聽いて居たが突然「おいその金で飲み明さう」と言ひ出した、可からうといふんで昨夜二人が元日の朝まで飲み明した、二人はすっかり親友になつてしまつたのだ、どうだい痛快ぢやないか」

「なる程痛快だ、森川といふ奴は男に惚れられる様に出來てるよ」

「男ばかりぢやないよ、なあ睦さん」と櫻井が聲を掛ける、睦子は答へずに蝶子の髪を弄つたまま恍惚として居る。

「萬龜さんは什麼だい」と櫻井は再び奥の室へ聲を送る。

「私好きよ、大好きだわ」と萬龜子は鏡の前で頭に髮針を挿しながら答へた。そこへ硝子戸を開けて森川が入つて來た。

六

森川の姿を見るや否や一同は椅子を離れて喝采した。

「森川君萬歳！」

「鼻嚙の命萬歳！」

門口を通り行く廻禮の絹帽を被つたり羽織袴を穿いたりした人々は何事が起つたかと店を覗いて行く。小栗といふ一人の男は即席に唄を作つて唄ひ出した。

「鼻を嚙つた森川は。藝口はたいてオツチヨコチヨイのチヨイ」
一同は之れに和して唄つた、而して卓子の周囲をぐる／＼廻り出した。奥にはお浪や睦子萬
龜子蝶子の女連は疊の上を轉がつて笑つた。獨り森川は只呆氣に取られて茫然と人々の爲る事
を見て居た。其れが可笑しいと言つて人々は猶ほも卓子を叩いて唄つた。彼等が唄ひ疲れた頃
には森川は奥の室へ年頭の挨拶に行つて居た。
「随分待たわ兄さん、昨夜私ちつとも眠れなかつた事よ」と蝶子は水々しい瞳を光らして狎へ
る様に言つた。

「濟まなかつたなあ」と克巳は心から悔悟する様な態度で怖々して言つた。

「可愛さうに蝶子さんはお雑煮も祝はないんですつて、兄さんと一緒になけりや御雑煮を食
ないつて爾言つてるのよ」と睦子はしみ／＼と言つた。

「やあ」と克巳は恐縮して頭に手を掛ける。

「巡查と一緒に飲み明したんですつて、厭な方ねえ」と萬龜子は鏡の前から言ふ。「本當に厭だ
わ、巡查の鼻を嚙つたりしてさ、人間が悪いぢやないの」慙う窘める様に言つたかと思ふと直

ぐ噴飯して「鼻を食べて美味かつた事？」

「やあ」と克巳は又も恐縮して頭を掻いた。

彼は睦子や萬龜子や蝶子に代る／＼責められても一言も言はなかつた、而して只だ矢鱈に頭
を掻いて居る。其れが如何にも可愛らしく如何にも男らしいと母のお浪は絶えず微笑を以て見
詰めて居た。人並より一寸も背丈が高く、すらりとして、運動で堅めた骨格はがしりと肉が緊
まつて居る。太い肩、大きな眼、眞直な鼻、色が黒く齒が白く、滅多に無駄な口を利かず腹も立
てず、沈黙つて居る代りに自然と友人間の尊敬を受けて、野球のグラウンドで捕手のボックス
に立つ時には全選手に偉大な力強さを與へると噂されるのも無理ではないとお浪は思つた。お
浪が何より好であつたのは克巳が思慮がありさうな顔でありながら何とも言はれぬ子供らしい
素朴な處がある點であつた。

「もう可い加減に森川さんを窘めるのは御止しよ」とお浪は笑ひながら娘達を制して「お眠い
でせう、お炬燵へでも入つて御寝みなさいな、睦さんお炬燵へ火を入れておあげ」

「あゝ眠さして貰はう」と克巳は言葉短に言つて「蝶さんお前は御雑煮を食べさしてお貰ひ」

「あゝ兄さんが起きるまで待てるわ」と蝶子は言った。

「もう眠るの？ 厭ねえ、歌留多をしやうぢやないの」と萬龜子は鏡を離れて傍へ来た、而して克巳の頭を見やつて「あら頭が泥だらけだわ、鼻を噛つた時に泥が付いたんだわ」

と頭の埃をびしやく打ちながら叩いてやる。克巳はにこ／＼しながら萬龜子の爲すが儘に任せてる中に、くりくりと居眠りを始めた。

「お炬燵に火が入りましたよ」と睦子が次の室から聲を掛けた。

克巳はよろ／＼と炬燵へ入つた。

「厭だわ、陰気で厭さ、晝日中寝るなんて厭だわ」

「おい森川、橋本が来たから、捕球をやらう、来い」と櫻井が店から言った。

「お寝みになつてよ」と睦子は答へた。

「はゝゝゝ」と一同が笑つた、而して唄ひ出した。

「鼻を噛つた森川は、炬燵に入つてぐう／＼／＼」

「滑稽な人達だわね」と蝶子は言った。

「學生さんは罪がなく面白うございますわ」

とお浪は言った。と突然克巳がのそ／＼出て来た。

「どうしたの？」と萬龜子は言った。

「眠られん」

「どうして」

「どうも君の處の蒲團や枕は女臭くて眠られん」

「家は女ばかりですもの」

「捕球をやらう」と克巳は逃げる様に店へ出た。

七

お浪は火鉢の前に坐つて何を考へるともなく茫然として居る。而して二人の娘が學生を相手に話してるのを夢心地で聞いて居た。外には風が出たやうだ、門松と注連を吹く音がさら／＼

と聞ゆる、次で森川と櫻井と橋本が捕球をして居る聲も聞ゆる。

「お止しなさいよ、歌留多をするから早く被來い」と妹嬢の萬龜子が大きな聲で店から怒鳴つた。

「歌留多なんか厭だい」と森川の聲がする。

「いやよ、私邪魔をするから」

「危ないッ？あゝ危なかつた、球を拾つて御出で」

「いやよ貴方が拾つて被來やい」

「君のために落したんだから君が拾へ」

「ぢや歌留多をする？」

「いやだい」

「ぢや拾はない」

「萬龜さん拾つて御あけなさい」と姉の睦子ははらくして言ふ。

「いやよ、森川さんの用なんか死んでもしやしないわ」

「ぢや私が拾つて來ますわ」

「いよ睦さん」怒う言つて森川は驅け出した様子。

母は雲時微笑ながら其の方に耳を傾けて居たが聽て一寸首を捻つて急須の御茶を音をさせて注いだ。

「何方が知らん」と彼女は口の中で言つた此の問題は彼女の肚に久しく蟠まつてる問題である姉の睦子と森川とは殆ど兄弟の様に親しいが、雙方とも何となく遠慮深い點がある、妹の萬龜子と森川とは全態犬と猿の様に仲が悪い、二人が寄ると喧嘩をする、悪口を言ひ合ふ、到頭萬龜子は泣いて口惜しがる、爾でありながら一日森川の顔が見えないと萬龜子は黙つて鬱ぎ込んでしまふ。

娘時代の心持は太陽に照られ行く雲の様に何方が表で何方が裏だか解らない、母のお浪は今の自分の若い時やら二人娘の素振やらを考へて注ぎさせた茶の冷たくなるを知らなかつた。店では森川と萬龜子が盛に喧嘩をする櫻井や橋本はわい／＼囁し立てる、其間に睦子が心配さうに仲裁して居る。

突然硝子戸の開く音がした。喧嘩の聲はひたと止んだ。
「……居やはりまつか」と聞き馴れぬ聲が言った、此の聲には答へず一人や二人くすくすと笑つたものがあつた。

「お母さんですか」と睦子は言った。

「お母はんだね」と件の男が言ふ。お浪の顔色は刷と變つた、而して彼女は慌てゝ座を起たうとしたが、聽て氣を靜むるものゝ如く冷たい茶を飲んだ。

「誰方ですか」と睦子が言ふ。

「お店から参りましたんね」と男が言ふ。今まで喧嘩して泣いて居た萬龜子は可笑しさを慄えた様な顔をして奥の室へ驅けて來た。

「お母さん、大阪の人が來てよ、お母はんが居やはりまつかだつて」

「爾？」と母は靜かに言った。「どうせ碌な用ではないんでせう」

慄う言つてる處へ件の男はひよつくりと入つて來た。慌てゝ外套を脱ぎ帽子を脱つた時綺麗に禿けた頭が疊の上に現はれたので萬龜子は又も眞赤になつて店に逃げた。

「これよ」と彼女は自分の頭を撫でる眞似をして見せた、一同はくすく笑つた。

「恐ろしい鼻の大きい爺さんだね」と一人が言ふ。

「大阪の人は皆な鼻が大きいよ」

「馬鹿言へ大阪の人間が鼻が大きいと決まつてるもんか、俺も大阪人だよ」と櫻井は言ふ。

「貴様は特別だ」と橋本が言つた、これは毎もお浪が言ふ言葉なので一同は笑つた、而して大阪嫌ひのお浪に會ひに大阪の人が來たといふ事が頗る不思議に思はれた。

八

來客があるので一同は奥の離室へ引揚けた。睦子は獨り残つて店を片付け初めた。彼女は突然の此の來客が何を齎して來たかを略推量した。而して胸を轟かしながら折りくゝ茶の間の様子を観いた。と聽て母の少しく急き込んだ聲が聞える。

「では什麼しても伴れて行くと仰有やるの？」

「はい、仕方がおまへんよつてな」と男は答へる。

「仕方があるの無いのぢやないぢやありませんか、元とく私に什麼して油谷の家と縁を絶たかといふ事を貴方は御存知でせう、何も娘二人を抱へて路頭に迷ひたい事はありません、けれどもあの人は大阪の藝者を落籍して妾になさる其れも其れだけなら構はないけれども、今度はお前は表面だけ別れてくれと恚う言ふんでせう、何も商賣のためだ、藝者は小金を有て居るか其れを資本に絞りに出して一儲けしたら屹度お前を什麼かしてやるし娘二人にも樂をさしてやるから其れまでは夫婦の關係を絶てくれと恚う言はれた時私の心持は什麼なだと思つて？女房や子供とお金とを兩換する様な人は良人でもない女房でもない、大阪では其那事が流行るかも知らないけれども東京では夫婦親子が餓死しても一緒に暮らさうといふのが人の道になつて居ます、私はもう呆れて愛想が盡きてあの人の言ふ通り御注文通にしてあげたんです」

母の聲は憤怒に慄えて涙が折々言葉を途絶らした。

「左様、御無理おまへん」と男は呼吸の切れ目毎に言つた。母は霎時涙を呑んでから又續ける。「女の身空で娘二人を伴れて東京に戻つて来た時私は首でも縊つて死なうかと思つたのです、



でも二人の娘……一人は九歳で一人は六歳の顔を見ると、什麼して繩片一筋でも首に當てられませうか、義理ある兄を頼つて轉がり込んだものゝ兄だつて其日々々を牛乳配達で暮らしてゐたんです、私はね、其時、兄の手傳ひに牛乳の配達までしたんです、此那事は娘共にも知らせません、私は卅三の年から今日まで恚して人様に後指一つ指された事もなしに二人の娘を馬にも踏ませず育て、来るには什麼に苦勞をしたかと思ひですか、其れを今ま妾が死んだから歸つてくれ、お前が歸らなければ娘を寄越せ、二人で不可いなら一人でも可い、娘は店の番頭に嫁つけてやるとは能くも能くも言へた義理ですな」

「そりや爾だんな……爾仰有やられると面目なうおま

つけれども、そこを何とかなお家はん」

「貴方は御使だから御迷惑でせうけれどもね、御歸りになつたら爾言て下さい、二人の娘は荒い風にも當てずに育て居ます、もう年頃ですからどうせ何處かへ縁付けますが、お金と女房を引替にするよな良人は有たせませんから御安心なさいと爾言つて頂戴」

「お家はん、其處の處をな何とか怵へて貰へまへんやろかなあお家はん」

「もう歸つて下さい」と、母は反抗的に言つた、男は却々動かない、而して長い間黙つた、と靜かに言ひ出す。

「旦那はんかて若い時にはな什麼な事がおましたか知りまへんけれどもな、今ではすつかり後悔しやつてな、貴方と嬢はんの事ばかり言て居やはりまつせ、それに此の暮から豪い熱病でな、氷が毎日一貫目も要りまんね、たつた一目貴方達を見たい、娘の祝言を見て死にたいと恚う言やはるよつてな……」

母は答へずに俯向いた。涙がほとりくと火鉢の縁に零れた。

「其れに御家はん」と男は又た續ける「別れた時には約束がある、其れは二人の娘の中どつち

か一人は私の方へ寄越す事になつてると旦那はんが言やはりまんね、其の約束を楯に兎や角言ふやおまへんがな、約束の事も約束だすさかいにな何しろ今では、何百萬圓いふ身代になりはつたのに只た一つ儘にならないのは貴方と嬢はんの事だすさかい……」

「歸つて下さい」と母は鋭く言ひ放つた。

「ほん困りますなあ」と男は頭をつるりと撫でた。

九

奥には歌留多の聲がする。

「御父様とお母様の間は其那事になつて居るのだ」

睦子は思ひ設けぬ新問題に胸を躍らして忸と考へ込んだ。番頭は例の大阪言葉で猶ほも續けた。其れは油谷家のためには什麼しても歸つて貰はねばならぬ事、強て厭なら二人の娘の中一人だけ至急に歸して貰ひたい、養子にしようといふ坪山爲三といふ男は却々の敏腕家である事、

大阪の本店でも東京の支店でもお嬢さんの好きな方へ置いてくれる事、店や別荘の立派な事などを並べ立てた。

「御歸り下さい」と母は三度び言つた。

「まあどうか其那に仰有らんと能く考へて見て下はれ」

「愚う言つて男は煙管を腰に差した。」

「山里は冬ぞ淋しさまさりける……」と歌留多の聲が一段賑やかに聞えた。

「もう歸るだらう」

「愚う思つて睦子は臺所から座敷へ出る押戸を押さうとするそ其處に萬龜子が兩袖で顔を隠しながら立て居た。」

「あら吃驚したわ」と睦子は小聲に言つた。萬龜子は顔を眞紅にして笑ひを耐へて居た。

「どうしたの？」

「あの禿さんの頭を御覽なさい、笹薺麥の様に底が空いてるのに一本づゝ綺麗に櫛を入れてるんですもの」

「聞えるわよ」と睦子は制して「話を聞て居たの？」

「えい、みんな聞いたわ、姉さんのお嫁貰ひの話だつたら後で一同と一緒に萬歳を言つてやらうと思つたら當が外れたわ」

「まあ暢氣だわねえ」と睦子は呆れて「どんなに思つて？」

「誰が行くもんですか、お母さんを酷い目に會はしたお父様の許へなんか、死んでも行きやしないわ、姉さんは什麼？」

「私だつて厭だわ、だけれどもね……」と躊躇つて「お母さんが被行やるなら私達だつて行かなきゃならないわ」

「其りや爾ですわ、でもお母さんは厭だと仰有るわ屹度」

「私も爾思ふけれども……でもお父さんも可愛さうだしね、私達だつてお父さんの顔が見たいぢやないの？」

「私見たくないわ」

「貴方は幼さい時だから忘れたんでせう」

「でも厭だわ」

「厭だと言つても仕方がないとなると什麼して？」

「姉さんは何故そんなに心配するの？」

「心配ぢやないの？」と姉は妹が餘りに此問題に無頓着なのに驚く様な眼をして言つた。

「行かないと決めれば可いちやないの」と萬龜子は明晰した眼をぱちくりさせて姉の神経質を訝る様に言つた。睦子は答へなかつた、而して自分の足元を見る様に首を低れた。

「戀すてふわが名はまだき立ちにけり……」と櫻井の朗らかな聲が聞えた。

「歌留多に行きませうよ、皆さんが待てよ」と萬龜子は促む。

「えい、後で行くわ」と睦子は益々沈んで答へた。

「直ぐでなくちや厭よ」と萬龜子は刻み足に出て行つた、其の後姿を見やつて睦子は両手を顔に當てた。

禿頭の男は何時の間にか去つたらしい、室の中は聞として音が無い、と聽て母の深い溜息が聞えた。

妹の蝶子と共に牛乳ホールを出た森川克巳が戸塚の家へ着いたのは九時頃であつた、蝶子は此頃兄が酷く沈黙になつたり又た急に躁浮ぎ出したり、夜中に家を飛び出して二時頃までランニングの稽古をしたり、大きな聲で突然笑ひ出したりするのを見て小さい胸を痛めて居た。が今日は馬鹿に機嫌が可い、昨夜警察の事件で留守だつたのでまんぢりともしなかつたけれども兄の活發に語る顔を見ると眠氣も起らない。

彼女は室へ入るや否や着物を着換へて長襦袢一つになつて脱いだ着物を疊み初めた。

「寒いよ蝶ちゃん」と克巳は悠然した氣持で妹の眞紅な姿を見やつて言つた。

「寒くないわよ」と蝶子は後ろ向になつて蹲がみながら言ふ。克巳は黙つて其の手元の動くのを見ながら賞めてやりたい様な笑つてやりたい様な心持でにや／＼して居た。と突然蝶子は慙う言つた。

「兄さん、お嫁さんを貰はない事？」

「うむ」と唸つたが克巳自身では其れが什麼いふ意味の聲だか解らなかつた、只だ暗夜に不意打を喰つた様！

「今年で卒業でせう、だから今から決めて置かなきゃならないつて爾言つた事よ」

「だ、だ、唯がそんな事を言つたんだ」

「誰でも」

「ばかな、嫁なんて、ばかな、兄さんはお嫁なんか要らないよ」

「いゝえ要るわよ」と蝶子は眞面目に言つて着物を畳み終り、次に帯に取掛つた。

「兄さんにはお嫁さんがあるぢやないか」

「何處に？」

「お前が兄さんのお嫁さんになるんだ」

「あら厭だ」蝶子は轉がる様に笑つたが急に嚴肅な態度で「兄弟はお嫁になれないぢやないの？」



「なる程お前は學者だ」と克巳は感服したらしく言つた。

「だからねえ兄さん」と蝶子は帯を畳んでしまひ長襦袢を脱いで銘仙の寢衣に着換へ箆笥を開けながら「早くお決めなさいよ、早くね、早くないと困るつて」

「誰が困るんだ」

「小母さんが」

「小母さん？」と問ひ返した時蝶子は漸と凡てを片付けて火鉢の前に來た。而して冷たい手で兄の手を弄り初めた。

「小母さんて誰だ」

「睦子さんのお母さんよ」

「うむ」と克巳は再び妙に唸つた。

「早く決める方が可い、兄さんに其の氣がないか什麼か聞いて見てくれ、私が聞いては本當の事を言はないからつて……而して其位の事に氣が付かない様では妹と言はれないつて私に爾言つた事よ」

「何だつて其那事を……餘計な」

「餘計な事ではないと私は思ふわ」と蝶子は大人らしく言つて吾ながら切口上なのに氣が付いて獨り笑つた。

「小母さんが何だつて其那事を言ふんだらう」

「睦子さんを貰つて貰ひたいんでせう」と蝶子は無雜作に言ふ。

「睦子さん？」

「えい爾よ、私睦子さんが大好でせう、睦子さんも私を一番可愛がつて下さるでせう、其れでね會日ね私睦子さんが私のお姉さんだと可いのにねえと言つたのよ、すると小母さんが何時でも姉さんにしてあげますよと言つたのよ」

「睦子……さん……か」と克巳は失望した様に言つた。「僕は嫁なんか貰はない」
蝶子は急に不機嫌になつた兄の顔を見詰めた。

— —

明るい電燈が八疊の間を照らして、鐵瓶の湯が煮る火鉢の前に兄妹二人が……一人は岩疊な岩の様な男、一人は蒼の様な少女……親しく語つて居る。

「どうして貰はないの？」と蝶子は狎へる様に言つた。

「兄さんはね、學問をしなきやならないだらう、そんな……嫁の事なんか考へて居るべき場合ぢやないぢやないか、まだくくく自分といふものが出來上つてからでなきや……」

「でもお嫁さんがあつてからでも勉強が出来るわ」

「不可」と克巳は叱る様に言つた。「兄さんは生涯獨身だ」

蝶子は黙つて弄つて居た兄の手を放した。而して泣き出しさうな顔をして恐るく兄の顔を

覗いた其れが如何にも惨らしいので克巳は急に顔を和らけた。

「兄さんは怒つてるんぢやないよ、可いかへ」

蝶子は微に首肯いた、而して危なく落ちさうになつた涙を拭へた。

「お嫁さんの話をしちや不可いの？」

「不可いといふ事もないけれどもね」

「睦子さんが私の姉さんになれるんだと思つて私喜んで居ただけでも……駄目なの？」

「其れはねえ蝶ちゃん、もつともつと後になつてからでも可い話だよ、兎も角兄さんは學生だ

らう、學生の時には勉強さへすれば可いんだ、嫁の事なんか考へると勉強が出来なくなるだら

う、すると兄さんは落第するだらう、爾だらう？」

「あゝ」と蝶子は合點したらしく又もや兄の手を弄り初めたが聽てとろりとした眼をして、

「私眠いからお先に眠るわ」

「あゝ可いとも」と克巳は身體を起して蒲團を敷いてやつた。蝶子は直ぐに床の中に藻線り込

んだ、而して嬌然して兄の方を向き何やら口の中で呟やいて居た。克巳は火鉢を押しやつて机

に向つた。其處には去年から読みさしの米國史が開いた儘に我を待つて居る。彼は一二行讀み

下したアブラハムリンコロンが主義のために戦つた一條は何時讀んでも血を湧かす處である。

と彼の眼は米國史を離れて障子の棧に移つた。其處には會日櫻井が赤インキで「馬鹿野郎」

と書いたのが其儘になつて居る。

「君は戀をしてるだらう」と櫻井が言つた。「そんなことはない」と僕が答へた。「嘘を吐け」嘘

は吐かん」此の口論の結果櫻井は僕を虚偽者だと言つた、そして馬鹿野郎と此處に書いた。

彼は今ま此の顛末を思ひ出した、而して彼は俄かに肩を揺つた。

「全く櫻井の言つた通かも知らん」

彼れ自らはこれが戀といふものだと思つて居なかつた、彼は戀の何物たるを知らない、

彼には此の女を我が所有にしようといふ考は無かつた、爾いふ事は學生として思ふまじき不

純なものであると思つた。だが此の不純さは益々烈しくなつた。

彼は人の話を聞き又小説を讀んだ、其等に依つて學んだ「戀」といふものは頗る清くして美

しくて純で靈的で明るいものであつた、併し彼の今の心持は毫も清く美しく純で明るくない、

彼の燃ゆる如き青春の血と肉と空想とは極めて不純で卑劣で性慾的で而して屈辱的なものであ
ると彼は思った。實際これが戀といふものなら戀は屈辱的なものだとは彼は心に恥た。彼は此の
不純な心持に打勝たうとしてどれだけ苦しんだか知れない。彼は折々夜半に床を蹴つて外へ出
る、或時は身體が氷の如く冷へる迄運動場の土の上に乗る、或時は疲れて疲れて倒れるまで町
中を走り廻る、而も彼は之が戀だとは信ずる事が出来なかつた。

「どうして俺は他人の様に純潔になれないんだらう」彼の苦みは只是であつた。是がために彼
は努めて萬龜子に反抗して見た、萬龜子とは離れて睦子に親まうとも思つた、萬龜子の悪口も
言ひ、喧嘩もした、併しそれは却つて自己を萬龜子の中に吹込む様な結果になつた。

障子の落書を見詰めた彼は臆て再び米國史を開いた。彼ははつと驚いた。そこに萬龜子の貴
麗な姿がある。瞳を定めると其れが段々に輪廓から崩れてリンコルの姿となる。

「馬鹿ッ」と彼は自分を叱つて本を閉ぢた、而して眠れる妹を見やつた、妹はすやくと美
くしく無邪氣な顔をして眠つて居る、枕に着く時に嫣然した其の笑顔その儘に眠つて居る。

「馬鹿ッくくく」と彼は又もや言つた。

三の靈

一

油谷家からの使を歸した後でお浪は二人の娘を火鉢の傍へ召んで一伍二什を話した。

「行かない事に決めてしまひませう」と萬龜子は明らかに言つた。

「爾いふ譯にはゆかないでせう」と睦子は思はしげに言つた。

「お前達の決心次第ですよ」と母が言ふ。

「ちや行かない、其れで可いわ」

相談は立どころに纏まつた。假令什麼な事があつても親子三人水入らずで暮らさう。此の決
心は室中が明るくした、二人の快活な顔を見てお浪も漸と安心した、而して口の中で「什麼
な事があつても行かない」と繰返した。一二週間は夢の如く過ぎた。

「其れにしても」とお浪は一日不圖思つた、娘達を早く形附けなければならぬ、順から言ふと先づ睦子だが……。

彼女は睦子に相應しい學生達を順々に頭に描いた。男らしいのは森川で賢く熱情があるのは櫻井で、頑固で豪傑なのは橋本だ、先づ此の三人の中何れが善からう。何れも善い人で立派だが、此の中森川さんだけは什麼して何方かの婿さんになつて貰ひたい。睦子にしる萬龜子にしる器量は人並であるし、學校も女學校を卒業したんだから人様に嫁つて恥かしい事もない。だが御當人の心持は什麼だらう。森川さんは黙つて居るから何だか見當が付かないが、多分睦子の方が御好きに違ひない。

お浪は恚う自分の考を辿つて更に森川の素振を彼れや是れやと對照して見た。

「着物が綻びたと言つては睦子に縫せる、お腹が空いたと言つては睦子に茶漬をねだる、そして、睦子とは長い間話をして居る、だが萬龜子とは毎も口論をなさる、滅多に一緒に歩く事もない、して見ると睦子の方が氣に入居るんだ、だが只お氣に入居るだけで嫁に貰はうとまで進んで居ないかも知れない、沈黙だけに本當に氣心が知れなくて困る、仕方がないから櫻井さんか橋

本さんに頼んで森川さんの氣を探つて貰はうかしら、いやあの人達も二人の何方かに氣があるんだとすれば餘計な事を頼んで大變に氣拙い事になるし……」彼女ははたと當惑した。と店の方で大きな欠伸をする者がある。

「誰方？」と聲を掛けた。

「僕だよ小母さん」と答へる

聲は森川であつた。

「あら何時被來つたの？」

「先刻から來てる」



お浪は黙つて障子の腰硝子から店を見やつた、森川の大きな脊中が硝子一ぱいに塞がつて見える。

「お入りなさいな」

「うむ、此處で可い」

「娘達は今ま御湯へ行きましたから私一人なんですよ」

森川は答へなかつた、而して心の中でひやりとした。御湯へ行かうが行くまいが娘達に用があつて来たのではあるまいしと彼は言ひたかつた、が其れは直ぐ腹の底で引戻された、實際の處は娘達に用があつて来たのに違ひないんだと腹の蟲が彼に言つたので。

彼は椅子に凭れて腕を拱みながら先づ官報を睽めた、叙位及び辭令といふ四號活字が讀める其次に誰か嘔りかけて捨てた束髪パンの缺片を睽めた、次に茶を零した痕が奇妙な形で卓子の上を這つて居るのを睽めた。と突拍子もなく彼の頭に今日の用事が苦い心持で湧いて来た。其れは丁度試験が近づいて来た時に能く感ずる不安の氣持である。

「どうしても言はう、今日こそは」と彼は口の中で言つた。悶えに悶えた此の苦みを一日も早

く解決せずには居られなくなつた。

「何と言はう、萬龜さんに何と言はう」

彼は前夜から……否數箇月前から獨り復習して置た言葉は極めて覺束なくなつて来た。

「貴方は僕を愛しますか、恚う言ふのは新派の芝居じみて輕薄だ、僕の妻になるか……これも餘りに唐突だ」

いつそこれは小母さんに言ふ方が可いかも知らん。

「小母さん萬龜さんを僕の嬢にして下さい」

其れが可いくと彼は決心した、而して一生懸命に卓子の上を見詰め「小母さん！」と聲を掛けた。

「え、？」とお浪が答へた。

「僕は餡パンを食ひます」と彼は突然に言つた。

「壘の中にありますよ」とお浪は言つた。

「臆病者ツ」と彼は自分を吐る様に言つた。而して仕方なしに硝子壺の中から餡パンを取

出した。

二

むしやく、館パンを食ひながら森川は忌々しさに堪へなかつた。小母さんとは障子一重を隔て、居る、四邊に人もなし、絶好の機会を看す、逃がしてしまつたと彼は思つた。彼は再び言ひ掛ける勇氣もなくなつた。是だけでも胸は早鐘の如く響き頭が赫としたのである。

と此時表の方で笑聲と足音がした。硝子戸が開くと先づ萬龜子の姿が見えた、彼の眼には只だ眞白な首筋と柔らかな喉を縊る様に合せた萌黄色の半襟が見えただけである。

「其ら被來つて、よ、私勝たわ」と萬龜子は言つた。

「被來しやい」と睦子はほつと湯上りに仄めいた顔をして嫣然し「あ、私負けたわ」と笑つた、而して二人はきやつく騒ぎながら奥へ入つた。

「お湯は好かつた事よ御母さん、空いてるから行て被來しやい今の中に」と睦子は言つた。

「爾かへ、ちや行て來ようかね」

「えい私御留守をするわ」

「だけれども私何だか氣が進まないんだよ、又父家から手紙が來てね」

「煩さいね、あんなに斷つたのに」と萬龜子が言ふ。

「そんな事は氣にしないで御湯へ行て被來しやい」

「ちや留守を頼むよ」

母は手拭と石鹼を持つて外へ出た。克巳は恚ういふ平和な家族の状態を見ると自分の父や母を懐ひ出す、そして自分も恚ういふ家族の人になりたいと思ふのであつた。

奥の室は各自に髪を直しかけてるので静かであつた。克巳は依然椅子に凭れたまゝ考へて居た。

「俺はまあ女に釣られてる様なものだ、何といふ意氣地なしだらう俺は女の尻を追廻すには未だ早い、學生だ、其れに俺は……」

自分を嘲る例の心がむらくと出た、彼は椅子を離れた、硝子戸を開けて外へ出ようとした

途端に萬龜子の聲がした。

「森川さん」

「何だい」

「待つて被居しやいよ、一緒に行くから」

「何處へ？」

「私用事があつて御宅の近所まで行くのよ」

「勝手に駆け、俺の知た事か」

彼は怒う言つて外へ出た時、何とも言へぬ勝利を感じた、豪い／＼能く言つた其れでこそ學生だと誰か賞めて居さうな氣がした。運動場の前に小高い丘を負うた赤土の平地がある、其處で子供が大勢ゴム球で野球をやつて居た。彼等は森川の姿を見るや否や敬禮した、彼等の眼には森川ほどの英雄が無いのである、他の大學と試合をする時、森川の眞黒な顔の一喜一憂が幾萬人の早稲田黨を一喜一憂せしめるのである。今森川が來たのを見て彼等小英雄は更に血を湧かした、下駄を穿いてるものは下駄を脱いで素足になつた、羽織を着てるものは羽織を脱い

だ。そして我こそ森川さんに賞められんと勵み出した。

「これだ」と克巳は豁然として胸に一種の響を感じた。

「俺は今ま全國學生の模範にならなきやならんのだ、此の子供等は悉く俺を知てる、俺を尊敬してる、俺を學ぶ、然るに俺なるものゝ狀は何だ、馬鹿ツ／＼」

彼は敢然とした勇氣が五體に湧き立つを覺えた、彼は微笑を以て此の子供等の眞摯な遊戯を睥めた。ものゝ十分間も經て彼は其處を去つた、丘を上つて細い徑に差掛つた時彼は思はず立停まつた、今まで氣が付かなかつたが彼れの十歩前を萬龜子が歩いて居る。

「はツ／＼」と萬龜子は崩れる様に笑つて「意地が悪いのねえ、待つてくれたつて可いちやないの」

怒う言ふ無遠慮で大膽で無邪氣な萬龜子の態度は毎も克巳が堪らなく好きなのであつた彼は黙つて寧ろ歡びの眼を以て萬龜子を見やつた。

「一緒に行かなくつて？」

「うむ」

二人は並んだ。

三

二人は段々學校と遠ざかつた、學生の群の喊聲や子供等の聲や其等が次第に後になりゆくと戸塚の町の半ば都會じみた半ば田舎じみた町が眼前に展開する、此日は三月の如く暖かであった、正月も末になれば何となく春の景色である、赤い郵便函の前で屑屋が二人暖かさうに日向に當りながら立話をして居た、其處の理髮床では亭主が小鳥籠を提げて戸を開けて出た。而して籠の小鳥に水をやりながら口笛を吹いて居る。

「私汗をかいだわ、随分足が早いね」と萬龜子はほつとした顔をして言つた。克巳は此の横町を過ぎれば自分の宅だといふ事を考へて居たので急に「なる程」と慌て、答へた、萬龜子はくすつと笑つて克巳の茫然した顔を見やつた。

「何を考へて被居しやるの？」



「いや……なに」と克巳は又も慌てた、實は宅の前で萬龜子と別れねばならぬから例の事を今まの中に言つてしまはなければ二度と機会があるまいと考へて居たのであつた。

「どうしても言へない」と彼は思つた。

「おやお宅の前ぢやないの？」と萬龜子は言つた。

「爾です」

「もつと歩きませうよ、今日は御天氣が好いから」

克巳は直ぐに足を返した、二人は再び並んだ、二時の日射は町を美しく照らして其處らの子供や犬や鶏やが悉く日向に出て遊んで居た、萬龜子は能く語り能く笑つた。學校の先生の逸話や櫻井と橋本が蕎麥を九つ宛食べた事や、お洒落なお友達の事やテニスに負けて口惜しかつた事や、明るい軽い調子で思ひ出し／＼言ひ續けた。中にも彼女は非常な姉自慢で姉ほど美人で高尚で親切なものは天下に無いと思つて居るらしい。克巳は頗る長閑な心持で其れを聞いた、而も時々萬龜子が何を言てるのか解らない時もあった。其れは例の事を考へた場合であつた。言はうか言ふまいか、馬鹿々々しい事だ、いや大切な事だ。

二人は何時の間にか池袋の方へ出た。而して何處へ行かうといふ事を語り合はずに／＼落合の方へ引返した。一二度二人は通り過る汽車や電車に嚇かされた。天はかつきりと晴れて長い／＼軌道の向ふは微かに霞んで見える、太陽に照られる軌道や、崖や、停車場の橋や、崖の赤土や、其の上の家などは一様に輝いて、ずつと遠くの野面で鎌を振つてる人が動く度にびかりびかりと硝子の様に光るのであつた。

「休みませうか」と萬龜子は堤の途中で言つた。

「うむ」

二人は堤を背後にして足を抛け出した、堤の上は線路である、二人の頭の上を汽車が通ると暫らく底鳴がして段々に松風の様になり薄らいで行く。足元の芝は暖かであつた、日は正面に二人を照らした。芝の中から萋草や嫁菜が緑の若芽を出して居る、土の崩れた處から藪の臺が頭を擡げて名も知れぬ下萌が白と黄の莖を現はして居る。

二人の話は途絶れた、克巳は黙つて次の言葉を待ちながら萬龜子を見やつた。萬龜子は恍惚と春の光に溶けゆく様な眼をして足元を見詰めて居た。赤に白斑の入った草履の鼻緒が白い足袋

に緩く當つて今にも脱けさうになつて居るのを萬龜子は兩足とも雛様の様に立て居る、爪先が斜めに小さく微かに鼻緒の色が滲んで居る。

「言ふなら今の中だ」と彼は思った、併し彼の胸は轟き喉が塞まつて什麼する事も出来ない。

「私ね」と萬龜子は言つた。私貴方に聞いて貰ひたい事があるのよ」

「どんな事？」と克巳は言つた。

「あのね、私、あのね」と萬龜子は言ひ溢つた。

四

萬龜子が言ひ溢つた時克巳は何とも言へぬ歡喜を感じた。

「或は僕と同じ事を考へてゐるのではあるまいか……いや其れは餘りに僕が自惚過ぎる……併し萬一したら……」

彼の頭は歡喜の底に混亂した。萬龜子は深い溜息を吐いた。日に酔ふた故か彼女の兩頬は林

橋の様に紅らんで美しく瞳は自らの情熱に溶けさうに見える。

今まで快活で雄辯であつた彼女は急に沈黙になつた、而して自らの胸の鼓動を數ふるかの如く片手を胸に置き再び「私ね」と言つた。

「私什麼しようかしら」

「何を」

克巳の肩に接着いた彼女の肩は激しく溜息と共に動いた。

「何か心配な事かへ」

「うん」と彼女は子供の様に鼻聲で言つて「可いわ、私言へないわ」

克巳は黙つた。彼は「僕でも言ひたい事がある」と言はうとしたが、其は口に出なかつた。

長らく沈黙が続いた、此沈黙の間に克巳は種々な事を考へた。其は殆ど取止のない離れ離れの妄想が走馬燈の如く出沒するのであつた。忽然として自分は萬龜子の良人となり忽然として蝶子が睦子の妹になり忽然として學校の教室で櫻井が講義をなし忽然として運動場が日比

谷の公園になる。汽車が轟然として頭の上を過ぎた。彼は不圖妄想から覺めて萬龜子を見た。

萬龜子は眼に充滿の涙を流して自分を見詰めて居た。

「萬龜さん」と彼は小聲で言つた。

「行かう」

「えい」

「又た遊びに来ようね」

「えい、毎日でも可いわ」

二人は立上つた。

「とう／＼機會を逸した」と彼は思つた。二人は眞直に路を急いだ。萬龜子は又もや快活になり雄辯になつた。

「送つて行かうか」と克巳は曲り角で言つた。

「いゝえ可いわ」

夕日が赫と町を明るくして高い丘の家々は燃える様に明るく低い家々は靄と夕餉の煙に昏れ初めて軒並に灯が點り出した。萬龜子は兩方の袂を揺かして少し屈み腰に歩いて行く、克巳は

凝と其れを見送つた、五六間過ぎた頃彼女は振り返つて此方を見た。と又思ひ返して荷車や往來の人の姿に紛れたかと思ふと、向ふのばつと明るい店の灯に微に其れらしい姿が動いて聽て全く見えなつた。

「路が彎曲でなければもつと見えるのに」と克巳は思つた。

克巳に別れた萬龜子は只管路を急いだ。彼女の胸は喜悅に満ちて居る、今まで顔を見ると喧嘩ばかりして居た克巳と二人限で散歩したのが今日が初めてある、染々と語つた、染々と笑つた、而して染々と嬉しかつた。

「男らしい方だ、優しい方だ、無邪氣な方だ」

「思ふ思ふと何も彼も嬉しい、路行く人に言葉を掛けて思ふ様笑つても見たい、跳んで踊つても見たい。」

「明日もある明後日もある、其の翌くる日も又た其の翌くる日も……」
限りのない是れからの月日が楽しい。彼女は例の如く荒々しく硝子戸を開けた。と見ると卓子の前に姉が茫然立て居た。

「只今」と彼女は言つたが音ならぬ姉の顔色を見て「どうしたの？」と問ひかけた。

「被來つたのよ」と姉は小聲で奥の室を憚る様に言つた。

「誰か？」

「御父さんが！」

「まあ！」

五

殆んど顔さへ知らぬ生みの父が來たと聞いて萬龜子は吃驚して姉の顔を見上げた。

「して什麼して」

「お母さんを散々お叱りになつて……御母さんが泣いて被居しやるのよ」

「お母さんを苛めたんですつて？馬鹿にしてるわ」と萬龜子はびくりと眉を動かして言つた。

「萬龜子が歸つたら二人共此處へ御出」と聞知らぬ聲が奥で言つた。

「私行かないわ、其那處へ、誰が誰が馬鹿にしてるわね」と萬龜子は聞えよがしに言つた。

「そんな事を言ふものぢやなくつてよ、七歳の時に別れた御父さんぢやありませんか」と陸子はははらくして言つた。

「來なければ來んでも可い、母親の躰が好いから親を親とも思はないんだね、立派に育て上げたもんだ」と父が吐き出す様に言ふ。

「あれ、行かないややお母さんが悪く言はれるからね」と陸子は宥める様に言つて、萬龜子の肩を押しながら共に座敷へ入つた。座敷の襖の側に母が俯伏して泣いて居る其れを見やりながら床の間の前に桐火鉢を抱へて苦がりきつて居るのは父であらう。萬龜子の眼には胡麻鹽頭と色の黒い顔の長い眉の太い、そして眉と眉との間に深い八字の皺のある老人が見えた。

「お前は萬龜か」と父は火鉢にのし掛る様な恰好をしてつくぐと見詰めた。

「私はお前の親父だ、は、は、は、お前達は親父を悪い奴だと思つてゐるだらう、お母さんの事だから散々悪口を言つたらうさ、は、は、は、まあ可い、何でも可いさ、なあお睦お萬龜大きくなつたね、何かへ、もう好きな男でも出來たかへ」

萬龜子はふいと顔を上げた、其眼は輕蔑と憤怒に燃えて居る。彼女は唇をわなくと慄はしたが、聽て自ら制する様に言つた。

「久し振で御眼に掛ります、私は萬龜でございます」

「好い女になつたなあ、お睦も却々別嬪だ、お前も別嬪だ、お睦は錦繪風でお前は當世流行の丸ほちやてえ奴だね、書生さん達が張りに来るだらう」

「其れが久し振でお眼に掛つた御父さんの御挨拶でございますか」と萬龜子は屹となつて言つた。

「何だと、お多福！」と父の聲が鋭い。萬龜子はわつと泣き出した。

「御母さん、之が私達の御父様なの？私達のお父様が此那人なの？あゝ私情ないわ」

「何を吐かしやがるんだい」と父は立ち上つた。

「御免なさい」と睦子は父の帯に縋り付いて言つた。「お父さん御免なさい、萬龜さんが悪いんですから、ねえお父さん、十年振りでお眼に掛つて厭な思ひをするのは私だつて厭です、お父さんだつてお厭でせう、お父さん何故もつと優しいお父さんだと私達に思はして下さらないの？」

「うむ、お前は感心だ」と父は再び坐り直して「此の家に人間らしいものはお睦ばかりだ」

「私は失禮します」と萬龜子は立つて去らうとした。

「待てッ」と父は怒鳴つた、而して急に何々と



笑つた、「俺が悪かつた、勘忍してくれ、爾だ、俺が商人だから上品な言葉を知らない、だが矢張りお前達の親父だ、今日は私自身で迎ひに来たんだからな、どうか一緒に歸つてくれ、可いか」
「私は厭です」萬龜子は決然と言つた。

六

父は萬龜子の顔をぢろりと見て眉根の皺を一層深く寄せた。

「なぜ厭だ」

「御父様に妾があるんでせう」

「爾だ」

「其れが死んだといふのは嘘でせう」

「うむ嘘だ、死にやしない」

「では會日の番頭さんが嘘ばかり吐いて行つたのね、御父様が大病だの、妾が死んだのつて」

「そんな事は什麼でも可い、私は油谷の家のためにお前達を迎ひに来たんだ」

「いゝえお父さん、其れではお母さんや私達の立つ瀬がないぢやないの？お母さんだつて随分妾に苛められたんでせう、而して御父さんも御母さんや私達を追出したんでせう、十何年間お母さんが什麼に苦勞をしたか知れないんです、其れが私達が漸やく大きくなつたからつて御父様の都合で三人を伴れて行かうといふのは酷いぢやないの？御母さんの身にもなつて考へて下さい」

「だからお母さんが行きたくなければ来んでも可い、お前達二人だけでも可い」と父は煙管の雁首を掌に叩いた。睦子も萬龜子も呆れて顔を見合した。

「其れでは話にならないぢやないの？御母さんを置いて私達ばかりが行けると思ひなさんですか」

「だからお母さんが来たければ来るが可い」

「お母さんは行けません」

「何故だ」

「妾が居ますから」

「解らん奴だな、妾が居やうが手掛が居やうがお浪は私の女房だ、戸籍上立派に私の妻となつて居る、お前達も私の娘だ」

「其れは違ひます、私達は妾の居る様な家へは入りません、お母さんを此上苦しませる事は出来ません」と萬龜子は一步も退かじと顔を蒼白にして言つた。

「親の云ふ事を聽かないのか」

「親の言ふ事」と萬龜子は繰返して「御父さん、貴方が私達の親だと思つて下さるんですか私達だつてどんなに父親が欲しいか知れやしません、でも貴方は私の御父様になつて下さらないぢやありませんか」

「親でないと云ふのか」

「御母さんの良人でない人は私達の親ではありませんわ」

「なぜ良人でないか」

「妾があるからです」

「學校へ行くと共に生意氣になるものか」と父は満面に朱を注いで怒鳴つた。

「だから御父さん、妾を追出して下さい、私達が可愛いなら妾を追出して下さい、御母さんを可愛がつて下さい、本當の親らしい親になつて下さい」

「解らんく、解らん奴だな」と父は煙管を火鉢に叩いて吃る様に急ぎ込んだ。萬龜子は少しも怯びれずに父の前に膝行寄つた。

「お父さんこそ解らないのです、何故私達を件れて被居しやらうとなさるんです」

「油谷家の相續をさせるためだ」

「では若し妾の腹から男の子が生れたら私達は要らないんでせう」

「何を？」

「いゝえ爾です」

國助はぐつと行塞つて劇しく鼻から息を吐いたが「其ればかりではない」と叫んだ。

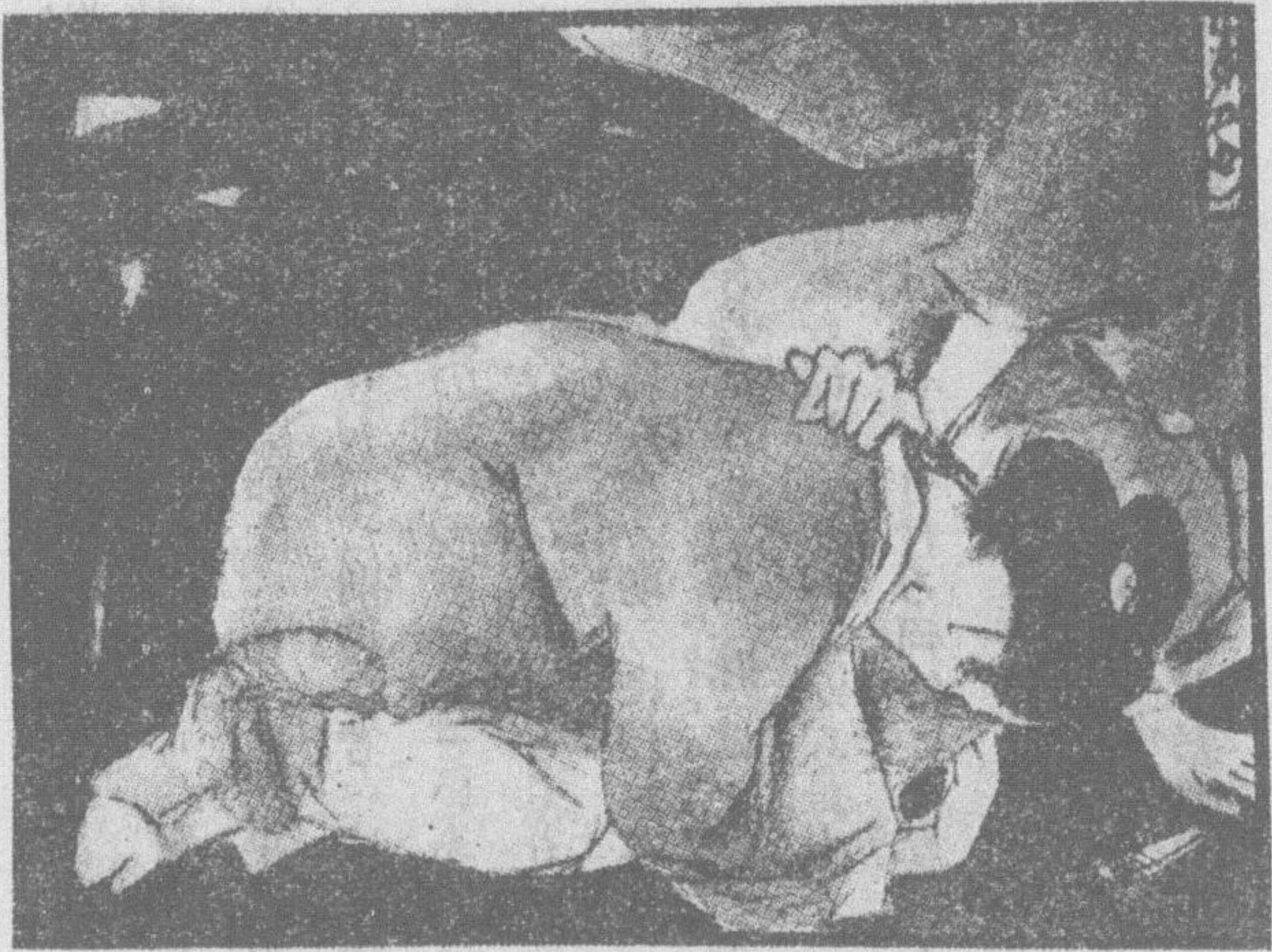
「お前達を幸福にしやうと思ふんだ」

「幸福は御母さんと三人憊うして暮らして居る方が此に越した幸福はありませんわ」

「財産が要らんといふのか」
「百萬圓の御金でもお母さんとは交換へる事は出来ませんわ」
萬龜子は凝と父の顔を見上げて涙をばらばらと零した。

七

睦子は氷の刃を渡る様な心地で萬龜子が父に反對して居る論難を聴て居た、而して今までは、
んの子供の様に思つて居た妹が、自分の言へない様な事まで臆面もなく言ひ張る大膽に驚く
と共に其の言ふ所が條理正しく何處までも母のため姉のために争ふ熱烈な愛情を感じずには居
られなかつた。泣き伏した母は膝を正して顔を上げ驚異の眼を以て萬龜子を見詰めて居る。
妾を迫出したら母も行かう私達二人も行かうといふ道理には何人も争ふ餘地がない、併し國
助には解らなかつた。富豪が妾の一人や二人を持つ位は世間一般の習慣であり又寧ろ富豪の矜
恃とすべきものである、其れを否認するのは學校上りの女だからではほんの小理窟に過ぎない、



もう少し世間の事が解ると男が妾を持つのは無理
がない位が解つて来るだらう、兎に角、娘の言ひ
條は理窟一點張だから採用の價値がない。
國助は恚う思つて居る。是れが父と娘との意見
の合はない第一の理由である。國助は次に恚う思
ふ。

「娘は絶対に父の命令に服さなければならぬも
のだ」

「だが萬龜子は恚う思ふ。」

「母に對して愛がなく子に對して愛のないものは
父でない」

國助は「此奴等を數百萬圓の相續人にしようといふのに何故喜ばないか、馬鹿な奴だ」と思ひ、

萬龜子は黄金よりも愛の生活が貴いと思ひ、國助は戸籍上の親子を重んじ、萬龜子は精神的の親子を重んず、一は日本古來からの習慣だけに據り一は其れよりもつと新らしい道徳を楯に取る。二人の議論が融和すべき餘地が更に無い。

睦子は其れよりも亦た別種な考へに迷ふた、親でありながら子でありながら一緒に暮らす事も出来ず、仇敵の様に睨み合ふといふのは何といふ情ない事だらう、此の儘父の許へ行けば母は益々苦勞をせねばならず私達とても泣きの涙で月日を送らねばならぬ、左りとて父を怒らしめて此處で親子の縁が愈々明かに絶れたら、母は良人の無い人になり、私も萬龜さんも生涯父のない娘にならねばならぬ、妹は一本氣で道理の前には少しも譲歩せぬ、母は感情的で妾のため散々苛められた恨があるから是も亦た融和の見込がない、併しこれには何か方法があるだらう、父と母の心を付ける何等かの結ぶものがあるに違ひない、其れは何だらう、什麼すれば可いだらう。

睦子が怒り感うて居る中に父と萬龜子との爭論が益々激しくなつた。
「親不孝者め」と父は齒切して怒鳴つた。

「親不孝と言はれても仕様がありませんわ、私は私達を捨てた貴方よりも、女手一つで私達を育て、下すつたお母さんが大切ですから」と萬龜子は昂然として言ふ。

「何を？御多福、死ばつてしまへ」と父は立上つた。

「打たれませう、殺されませう」と萬龜子が言ふ間に父は母の頭をむづと攔んだ。

「手前が此那に仕込みやがつたんだ、さあ今日こそ本當に縁を切つてやらあ」

蝶螺の如き拳骨が宙に閃めくと同時に裂帛の様な睦子の聲が起つた。

「待て頂戴！御父さん！」

睦子の白く細い腕が父の腕に絡んだ。

「私が参ります、御父様の處へ参ります」

「怒う言つて彼女は父の胸に顔を當て、泣き出した。

「お前が行くか」と父は霎時あつてから言つた。

「えい参りますわ」

「姉さん！」と萬龜子は姉の顔に我が顔を押し付けて泣いた。「厭ですく姉さん行ちや厭です」

父の態度はがらりつと變つた。

「よく解つてくれた、お前は本當に賢い子、さあ御坐り」と彼は睦子と萬龜子を坐らせた。

「姉さん行くの？」と萬龜子は姉の顔を覗く様にして歎歎りあけた。睦子は黙つて首肯いた。

「厭だわ姉さん、姉さんが厭な思ひをして暮らすのを私見て居られないわ、ねえ姉さん三人一緒に今までの様に面白く暮らませうよ」

萬龜子は聲を擧げて泣いた。

「何を言つてるんだ」と國助は苦々しく言つた。

「萬龜ちゃん」と姉は我が膝に泣き伏す妹の後れ毛を撫で、やりながら「御父様が今ま氣が昂て被居しやるから何も言つちや不可ません、何と言つても御父様は御父様ですからね、縦令御父様に悪い事があるにしても私達は其れを騒ぎ立て、は不可せんわ、靜かにくね、機を見

て御父様を御諫め申してね、妾や何んかを出してしまつて御母様を元々通りに御父様の御側へ上げる様にしなけりや不可せんわ、其れをするには私達より他ありませんもの、ねえ萬龜ちゃん！可くつて？私の言ふ事が解つて？幾ら理窟を言つた處で絶らうとしても絶られない親子の間柄ぢやありませんか」

「だつて姉さんが爾思つても御父さんが改心なさらなきや無駄ですもの、姉さんだつてこれから什麼な辛い思ひをするか知れないぢやありませんか」

「爾那事を言ふものぢやありません、これが私達の勤です」と姉は聲を勵まして言つた。母のお浪はもう生體なく泣崩れて居る。

「何も言ふ事はない」と國助は投げる様に言つた。「お睦が行くといふにお前達が水を差すに當らないぢやないか」

「でも姉さんは……」と萬龜子は泣き腫らした眼を父の方へ向けて、

「私のたつた一人の姉さんですもの、そんな厭な處へ……」

「黙つて被居しやいね」と睦子は袖を惹いた。

「では本當に行くんだね」と父は念を押す。

「はい」

「後で文句はないね」

「はい」

「これから何でも私の指圖通りにするんだよ」

「はい」

「私が決めた養子があるが其れも異存がないな」

「はい」と睦子は我が決心を猶ほも勵ます様に一段決然した聲で言つたが顔は大理石の如く蒼白めて唇がふるくと慄へた。

「姉さんが、そんな見えず知らずの養子を取るの？」と萬龜子は言つた。

「えい」

「厭な人だつたら什麼して？」

「萬龜ちゃん」と睦子は萬龜子の肩に顔を當て「私死んだ積りで行くんだから、何んにも厭な

事はないわ」

「でも其りや餘まりだわ」

「もう何にも言はないで、もう何にも何にも」と睦子は二言三言續けたが妹の肩から顔が離れると同時にぱたりと疊に倒れた。

「姉さんく」と萬龜子は狂氣の様に叫んだ。

「大丈夫よ、大丈夫よ」

恚う言つて睦子は立上つた、よろくくと二足三足、踏みしめやうとしては又た踰躑と障子の棧を頼りに次の室へ去つた。お浪も萬龜子も直ぐ後に従いた。睦子は店へ降りた、卓子に手を突いて頭をぐたりと低れたが、靜かに椅子に腰を下して母の持て來た洋盃の水を一口に嚙み干して、「大丈夫よ」と再び言つて母に嬌笑して見せ「御安心なさいね、もう快くなつたから」母は柱に縋り付いて背後を向けた。

「ぢや直き迎に來るからな」

「怨う言つて父が歸つた時睦子は其後姿を見送ると同時にぐらくと眼が眩んだ。一時間の後彼女は奥の室に寝かされて氷嚢を頭に載せられて居る自分に氣が付いた。

「氣が付いてよ」と萬龜子が嬉しさうに言つた時、母の心配さうな眼が自分を見詰めて居るのを見た、で彼女は嫣然して見せた。

「あゝ嬉しい」と萬龜子は言つた。

「おう能くまあ氣が付いてくれたね」と母はもう涙脆く頻りに眼を瞬いて居る。

「もつと眠たいわ」と彼女は言つた。

「ぢや彼方へ行かうか」と母が言ふ。

「私だけ添いてるわ」と萬龜子が言ふ、其の中に睦子は再び昏々と眠つた。

此の事を聞て例の學生達が森川、櫻井、橋本を首として皆な集まつた、或者は醫者へ走り或者は氷を買ひに行つた、克巳の妹の蝶子も來た而して枕元を離れず看護した。人々の厚意空しからず其の曉方から熱が次第に冷めて來た。睦子は極めて大きな火の輪が環の如く旋轉しては中



から崩れ、崩れては又た擴がり直ぐに手毬ほどに小さくなり又た赤や青や紫や黄金色の無數の輪となつて搖き廻る、而して其れがぱつと消えたかと思ふと直ぐに現はれ、同じ事を幾度も繰返して居る中に色が段々水淺黄となつて涼しい風が音立て、吹くと思ふ途端に眠から覺めた。

「あゝ綺麗だ」と彼女は霎時恍然した。

「夢を見たの？」と萬龜子が言ふ。

「えゝ、綺麗な夢よ」

是で大丈夫だと人々は思つた、彼女は始めて人々に手敷を掛けた事や人々の親切を感じた、而して其夜は努めて母や妹や蝶子を枕元に集めて快活に話した。

「皆んなで陽氣に遊んで頂戴」と彼女は言つた。

「歌留多をやらう」と學生達が言ふ。

「えい私次の室で聞いて居ますから」

一同は喜び勇んで歌留多を初めた、恚ういふ事は睦子の病氣には宜しくないといふ事をお浪は知つて居た。併し睦子は陽氣に賑やかにして貰はなければ胸苦しくて堪らないのであつた。間が透がな閃めいて來るのは昨日の問題である。父と母の仲直りをさせるには什麼しても自分が犠牲！にならないければならない、犠牲！犠牲！と彼女は幾度となく口の中で言つた、而して父のため！母のため！と又繰返した。彼女は犠牲といふ美しい言葉をもつとく美しい文字や親孝行といふ美しい言葉をもつとく美しく見做して自分の苦しさを忘れる様に努めた、丁度出征軍人を見送る人々は「國家のためだぞ、君のためだぞ」と言つて勵ます様に、彼女自身に向つて「これは立派な事だ」と賞め稱へ而して苦みを忘れやうとした。

併し恚う思つて居る矢先に、殆んど不意に胸を刺す様に暗い／＼影法師が襲うて來る、母に笑顔を向けてる中に堪らない程の悲哀が骨を削る様に迫つて來る。

「他の事は何でも辛抱するけれども是ばかりが何とかならないものかしらん」

是ればかりといふは我戀である、克己に對する愛である。

「行つてしまへばもう其れきりだ二度とは御目に掛れない、生涯を厭な養子に捧げねばならな

い」

男には事業があらう、名譽があらう、戦ひがあらう、女の生命とする處は只愛である、美しい犠牲も可し親孝行もしたいは山々だが、何年間思ひを焦して居た男に胸の中を打明ける事も出來ずこれきり暗の中に朽ち果てるのかと思ふと泣かすには居られない。

「我袖は汐干に見えぬ沖の石の…」と櫻井が朗らかに讀んだ。

「よい來た」

「人こそ知らね乾く間もなし……」

「全く爾だ」と睦子は枕に頭を當てた儘身動きもせず聞て居た。

一〇

今までは何とも思はずに暗記した百人首の歌は何ぞいふ譯か今日に限つてしみ／＼と身に沁み込むやう。

春の夜の夢ばかりなる手枕に空しき思を泣いた人もある、人知れず思ひ初めに浮名ばかりが先出つを恨んだ人もある、底知れぬ淵に比ふ戀もあれば、相見ぬ昔の方が氣樂であつたと啣つ人もある。數多き歌人の數多き歌はあれども、睦子が今の苦しさに優るものは一つもないと彼女は思つた。

「生理にされる様な苦しみだ」と彼女は肚の中で言つた。爾だ生理だ、而も身體を土に埋めて首ばかりを外に出して世間を見て居ねばならぬのだ。

睦子は泣然として涙を垂れた。

「あら什麼かしたの？」と萬龜子が言ふ。

「いゝえ、何でもないのでよ」

蒲團に顔を埋めて凝と怵へてる中に彼女は又しても發熱がして來た。而してうとくと眠つた。

萬龜子は歌留多を蝶子に譲つて枕元に付き添うた、而して竊と姉の頭に氷囊を載せて寢呼吸を窺つた。たつた一日の病氣だけで頬の肉がけつそり減つて蒼白めた顔に生氣がない。

「此那になるまで辛い思ひを怵へて御父さんの許へ被居しやるといふのは何と云ふ慘酷な事だらう」と萬龜子は今更の如く父が恨めしくなつた。

「姉さんは何よりも私とお母さんに別れるのが辛いんだ、其りや私だつたら逆も辛抱が出来ない事なんだもの、こんな善い姉さんやお母さんに別れたら死んでしまふかも知れない、何故姉さんが御父さんの許へ行かなくちやならないんだらう、斷れば可いのに、本當に斷れば可いのに」

萬龜子が怨う考へ込みながら姉の顔をつくぐと見成つて居た。と微かに極めて微かに歎歎泣きの様な聲が聞える。次で烈しい溜息が二度ばかり出た、と又た寂寞に復る。

「悲しい夢を見て居るんだわ」と萬龜子は思ふ途端に睦子の唇が微かに動いて、

「克巳さん、私辛いわ」と睦子は言つた。萬龜子は吃驚して次の室を見やつた、而して姉の口元へ我が耳を寄せた。

「仕方がないんですもの……ねえ克巳さん……私の心が解つてくれて？……私の口からは言へないんですもの……御免なさいね……御別れにたつた一度ね、貴方の御返事が聞きたいんです

……いゝえ聞かない方が可いわ、若しも私が御厭だつたら私はもう……あゝ私厭ですく御父さん私行くのは厭です、私死にます、……あゝ死にます、お母さんと萬龜さんを可愛がつてねえ御父さん……ねえ、ね、ね」
烈しい歎泣きが初まつて眠つた眼から涙が滲み出た。萬龜子は背筋に氷の棒を突込まれた様な気がした。

「あゝ姉さんが克巳さんを！」

如何なる驚愕も是ほどの事がない、我が生命を掛けて未來の良人と定めた男は姉の戀人であつたのだ。父の前で立派に言ひ切りながら直ぐ卒倒したのも是がためであつたのだ。

「姉さんが克巳さんを！」と彼女は再び繰返した。突然姉は聲を出して泣いた。而して眼を開いた。

「あゝ私夢を見て居たわ、何か言はなくなつて？」

「いゝえ姉さん」と萬龜子は言つた。

「あゝ爾？」

「よつく御眠みなさいね」

「驚はれたら起して頂戴ね」

「えい」

姉は又もや睡入た。

— —

萬龜子の心は千々に割れた。

「姉さんは死ぬかも知れない」

彼女は突然恚う思つた時慄然と身を顫はした。戀人に別れて厭な男の妻になる位なら死ぬ方が可い、私だつたら矢張死ぬだらう。

「姉さんはお父さんとお母さんの仲を結び付けるために行くのだ、それが濟むと自殺する決心なのだ」

萬龜子は凝と姉の寝顔を見詰めて呼吸も吐かずに考へを辿つた。

「爾だ、確に爾だ、姉さんが死んだら私什麼しやう、死ななくたつて姉さんを暗い處へ追ひやつて私が其の戀人と夫婦になるなんて事は出来やしない、あゝ什麼しやう、姉さんは何故早く私に打明けてくれなかつたのだらう、私でなければ克己さんだけにでも言へば可かつたのに」
彼女は強て自分の心を静めやう静めやうと努めたが、咄嗟の驚愕に氣を顛倒された彼女は最早纏れ来る種々な感情や理性や空想を制する事が出来なかつた。睦子はすやくと快い眠りに入つた。眞直な鼻筋、切目の長い眼、小さな唇、何處から見ても優しい姉である、美しい姉である、幼稚園から小學校、それから女學校と順送りに通つて居る間に、學校の支度やら復習やらお琴やら生花やら、着物の事やら髪を結ぶお化粧をする、足袋や襦袢の洗濯まで骨身を厭はずに可愛がつてくれた姉である。

其の姉が今ま身に餘る悲哀を包んで父の許へ死に、行く。

「どうしても助けて上げなければならぬ」と彼女は漸と考を決めた。扱て助けるには什麼したら可いか、二人の中一人が行かなければならぬものとするれば、而して姉さんを行かしめな

いとすれば、歸する處は自分が行かねばならぬ。

「爾だ、私が行かなきやならん……でも」

考へに考へ抜いた結果は、今まで遠くの火事だと見て居た事が切實に我が上に落ちて來たのであつた。

「私が行くとすると……私が……」

徑路は全然姉と同一である、姉は戀を捨て、死に行き、自分も矢張戀を捨て、死に行くのだ。而も其の戀人は同じ人なのだ。一人が生ければ一人が死なねばならず、一人が明るくなれば一人が暗くなる。

「あゝ〜」と彼女は袂の尖を嚙むで泣いた。他所の親達は自分を犠牲にしても我子を幸福にしようとする、家の御父さんは娘を犠牲にして自分勝手の事をなさる。

これが他人であつたなら、競争しても戀人を取らう、だが世界中の誰よりも親切で優しい姉の戀人を私が什麼して取られやう、取られないとすれば私が父の許へ行く方が可い。
「爾うだ行く方が可い」

「愆う言ふ下から彼女の腹の蟲が再び頭を擡げる」でも私は克巳さんは思ひきれない」
歌留多が止んで人々が散つた。

「左様なら」と蝶子は暇を告げに來た。

「大分快い様だね」と克巳は立ちながら睦子の顔を覗いた。睦子はぱつちりと眼を開いた、而して克巳に向つて嫣然した。此時萬龜子は何となしに赫と顔が熱した。而して不安と嫉妬に胸が躍つた。

「左様なら、大切にしまへよ」

愆う言つて克巳と蝶子は去た。出る時に克巳は萬龜子の方をちらと見た、而して何とか萬龜子から愛想の好い言葉が出るだらうと豫期せらるゝものゝ如く躊躇して居た、其れを萬龜子は早くも感じて居たが扱て何んにも言はなかつた。

と一瞬間にして萬龜子は直ぐ正氣に復つた。

「あゝ私本當に厭な根性だわ、これが嫉妬といふものか知ら、此那事から私姉さんを憎む様になつちや大變だわ」と彼は心の中で言つた。

二二

睦子の氣分が捗々しからぬながらも床を出る位になつた、父の許からは數々催促が來る、今ま一日々々と延びくゝになつて居たのが到頭其の日が迫つて來た。萬斛の憂を懷くとは知る由もなく、學生連は睦子が金満家の父の許へ行き實業家の養子を迎ふるといふだけでも大盃を擧げて祝さねばならぬと思つた。

「送別會をやらう」と一人が言ふと悉く其れに賛成した。婦人の事だから蠻的な豪飲は不可い、茶話會にして皆なで誕降祭の様な餘興をやる様にしようといふ蝶子の提案は異義がなかつた。喜ぶべき事なら此方から願つても祝はつて貰はう、死に行くに何の祝があらうと睦子は腹で泣いた、斷つたが許されない彼女は愆う思ひ返した。祝の送別會を私は葬式だと思ひませう、而してしみぐと皆さんの親切を心に刻んで行きませう。

一日萬龜子は森川に愆う言つた。

「克巳さん散歩に行かなくつて？」

「うむ行かう」

「朝から晩まで疲れて動けなくなるまで歩くのよ」

「可からう」

二人は家を出た。此日は風が少し出て寒かつた、併し萬龜子は少しも怯まなかつた、彼女は例によつて能く語り能く笑つた、二人は曾日歩いた路を辿つた。線路を左に何處までも行く、果しなく歩き続ける。だが克巳は折りく、萬龜子が深い沈黙に入るのを見た。

「君は什麼かしてるね」

「いゝえ、私詩を考へてるのよ、詩は可いものね」と彼女は言つた。而して聲を限りに唄つた。

「打明けるのは此時だ」と克巳は又しても思つた、が萬龜子は殆んど其の暇を與へなかつた、彼女は間斷なしに饒舌つた、唄つた、走つたり踊つたり溝を跳び越えたり、鶏を追ふたりした。「全て子供だ」と克巳は思つた、そして「此頃君と僕とは喧嘩しなくなつたね」と言つた。



「喧嘩してゐる方が可かつたわ」と彼女はしみじみと言つた。

「何故だ」

「都の西北……」と彼女は克巳の間に答へずに唄つた。二人は會日の土手に腰を下した。

「何んにも言はずに一時間悠うして居ませう」と萬龜子は言つた。で克巳も其通にした。天に雲が遊んで居た、其の中を太陽が潜りつ入りつした。其度毎に向ふの田圃が順々に明りくなつたり暗くなつたりする。田圃の外れは森で森の中から煙がゆらゆらと立騰ると聽て薄霞に溶けて遙かの村を抹して行く、田圃と森の間に一條の路がある、其處を出入する犬や馬や荷車は夕日にばつと燃えて見えたり又鼠色に見えたりした。折りく通る汽車の外は音といふ音は全く絶えて日に照らるゝ枯芝の土はぬくぬくと膨くれ出しさうに暖かい。二人の沈黙は長く續いた。時には何方か規則を破りたさうにしたが直ぐ思ひ返して黙つてしまふ。一時間は過ぎた。二人はもつともつと長い沈黙で居たい様な氣がした。と萬龜子は又もや美しい聲で唄ひ出した。

心にながく捨てはてし

面影 またも浮ぶかな

きみがことばの中にして

身にしみたりしものや何

我を戀ふとな君……

(有明氏譯ハイネの詩)

此處まで唄つた時彼女ははたと口を噤んだ。而して「さあ行きませう」と言つた。

何といふ好い聲で又た何といふ情調だらうと克巳は思つた。彼は家へ歸つたが其の聲はいつまでもくも耳に残つて居た。

— 111 —

其の日は朝から雨が降つて夕方になると一層烈しくなつた。家根や軒を打つ雨音は恰らに溪流の如く響く、四時になると室の中は昏くなつた。電燈が點くまで間があるので世話方の人達は

蠟燭に火を點して準備に掛つた。恚ういふ事に掛けては櫻井が一番器用であつた、蝶子は手も顔も赤インキや墨だらけにして種々なものを書いた、先づ大きな紙に「睦子さん送別會場」と櫻井が筆を揮つて座敷の入口に貼つた。其れから判じものや繪さがしや其れは蝶子の手に成つた。一番喝采を博したのは櫻井の意匠で「睦子嬢一代記」と題する繪であつた。先づ母の出産の光景から書いて幼稚園通からミルクホールの應對係から一轉して富豪の令夫人になり、夜會服でダンスをやり自動車に乗て顛覆かへり、遂に赤兒を生んで振出しの母の出産と同じ光景に立復る、途中の種々な形が違つても人間の一生は歸する處は同じ圈内を廻るものだといふ哲學的の考案だといふので櫻井自身が得意になつて説明した。

兩戸を二枚外して其の上に乗せて床を造る、毛布を敷き火鉢や鐵瓶湯呑と恰らに寄席の高座が出来た。天井に五色の切紙や南京玉の紐が渡された。恚ういふ子供じみた趣向は酷く一同の氣に入つた。

車軸を流す様に降り注ぐ雨を冒して十二三人の人々が集まつた頃に電燈が點つた、蠟燭の灯は懐かしいといふので燃え盡きるまで消さずに置いた。活人畫で蝶子は正行になり櫻井が正成

になつた。蝶子の下膨れの可愛らしい顔は如何にも上品で氣高く見えた。櫻井の正成は紙袋で作つた烏帽子が頭に合はないので幾度も滑つて落ちたので大喝采であつた、蝶子と睦子と萬龜子との三曲合奏もあつた。藝なしの橋本は一同に強ひられて澁々ながら四ん這になつて片足を擧げた。自ら註して三本足の馬だといふ。一同は腹を抱へて笑つた。

夜が進むに伴れて雨は止んだ、暖かい春の夜、人々の賑ひで室は明るさを加へた、睦子は人の厚意を感謝した。身を切る様に辛い思ひを忪へて父の許へ行く、辛さは人の知る處でない彼女は心で泣いて笑顔で人々の親切に報いた。

賑やかな笑聲と話聲を現に聞きながら庭を見やると雨後の月は洗はれた鏡の様に、庭の竹叢や檜葉や手水鉢や板塀や凡ての濡れ色を照らして居る。

「明日から此月を何處で見るであらう、恚ういふ嬉しい人々の會合はもう二度と見る事は出来ない」

彼女は折りく、克巳の方を見やつた。而して一生見忘れない様に記憶のどん底に刻んで置きたいと思つた。克巳は人々と共に能く語り能く笑つて居た。あの方は私が恚那に辛い思ひをし

て居るのが解らないのかしらと思ふと餘りに情なくなつてつい涙が催して来る。

「いつそ別れ際に思ひのたけを打明けやうか」と胸を轟かす、「いや其れは却て思ひを増すばかりだ」と思ひ返す。千々に亂れた心を泳へれば泳へるだけ胸が迫つて呼吸苦しくなる。此の時彼女は萬龜子の顔を見た。萬龜子は毎もに似ず沈み勝であつた。人よりも大きな聲で騒ぎ、饒舌り笑ひはするものゝ什麼かすると黙つて急に泣き出しさうな顔になるのであつた。

「こんな面白い事をして遊ぶ事が出来なくなるわね」と睦子は、妹の手を取てしみるゝと言つた。「えい、本當に爾よ」と萬龜子は姉の手を堅く握りしめて「姉さん私を忘れないで頂戴ね」「忘れるなんて事はありやしないわ、だけれども男と異つて女の姉妹は何かにつけて自分の思ひ通りにならないからね」と睦子は言つた。

「でも私……姉さんのためなら私どんな事でもするわ、生命を捨てたつて構はないわ」と萬龜子は涙ぐむで月を見上げた。手水鉢の傍の竹の葉から雨の雫がほたりくと落ちる、其れが金剛石の様に紅や紫や青の美しい光を雫す。睦子は其れを見るとなく見ぬともなく言つた。「私だつてお母さんと萬龜ちゃんのためなら何時でも死ぬわ」

二人の手は又も確乎と握られた。

一四

餘興が進むにつれて人々は熱した、謙遜して居た者も今は平氣で隠し藝をやる様になつた。終りは萬龜子が姉を送るための自作の歌詩を獨吟する事になつて居る。

今は感興絶頂に達して居る。橋本は二度目の藝として大きな聲で體操の號令をやつたので一同拍手喝采した。

「萬龜さんの獨吟だ」と櫻井は言つた。

「眞打早く出る」と人々は叫んだ。

「萬龜子さんく」と蝶子が呼んだ。

「太夫身支度の間暫らく待たせ置かれませう」と櫻井は曲馬の口上で言つた。だが萬龜子は出て来ない。

「どうしたんだらう」

「何處へ行つたんだらう」

「萬龜さん萬龜さん」

母も蝶子も睦子も櫻井も克巳も家中を呼び廻つた。姿が見えない。とお浪は火鉢の猫板の上に通の手紙があるのを認めた。

「母上様萬龜子」と表に書いてある。お浪は急いで封を切つた。而して読みゆく中に、彼女の顔色は蒼白になつた。

「どうして？」と睦子が言ふ。

母は黙つて睦子に手紙を渡し、人々に向て「萬龜は急に用事が出来て親類へ参りましたから皆さんよろしく」と挨拶した。

歡樂の終は哀傷であつた、人々は氣の抜けた様な顔をして散々になつた。母の言葉で森川兄妹と櫻井と橋本だけが残つた。人々の去つた後の室は亂雑なものであつた、襖は取外されたまゝで座蒲團が散らばつて火鉢は煙草の吸口だらけで、土瓶や茶碗や菓子袋の死骸が淋しげに枕を

並べて居る。高座に點した蠟燭だけがいやに明るく、音たてゝ涙を垂れて居る。お浪は萬龜子の手紙を睦子にもう一度讀む様に言つた。何事かと森川其他の人々は胸を騒がした。睦子は聲を顫はして讀んだ。

「お母さん姉さん、私は昨夜此の手紙を書きかけましたが心が亂れて書けませんでしたから今再び書き出しました。此の手紙は森川さんにも櫻井さんにも橋本さんにも見せて上げて下さい。お母さん！私は御父さんの許へ参ります、何故参りますかといふ私にはお金欲しくなつたからです、此那ミルクホールの様な惨めな貧乏暮しが厭になつたからです、お父様は何百萬圓といふ財産があつて、其れを譲つて下さると聞いた時私は眼が眩む程羨やましくなりました。姉さんが其那立派な身分におなりなさるのに私は詰らない一生を送るかと思へば情なくなりました。私は思ふ存分贅澤な生活がして見たいんですもの、姉さんを出し抜いて出世しようといふものは人の道でないかも知れませんが、姉さんとお父さんの許へ行くのは氣が進んで被居しやらない程ですから私が代りに参ります。

虚榮の女だと御笑になつても仕方がありません、實際私は虚榮の女です、今夜姉さんの送別

會に皆さんが御集まりになるでせうが、私は其れを私の送別だと思つて居ます、お母さんと姉さんに海山の御恩を受け又皆さんに一方ならぬ御親切を頂戴した御禮は此に書き盡せません。どうぞ我儘な私を憫れみ下さい、私は虚榮の女です。

私の望みを叶へさせやうといふ御慈悲が御ありなされるなら何卒此事に就て故障を仰有やらないで下さい、安らかに御父さんの相續人にさして下さい、養子はどんな人でも構ひません、私は人と夫婦になるのでありません、お金と夫婦になるのですから。

御母さん初め皆さんの幸福を祈ります。姉さんどうぞ本當に貴方の思ふ様に暮して下さいね、貴力の幸福と私の幸福とは異ひますからね。左様なら皆さん……左様なら……左様なら。萬龜子」

一五

手紙を読み終つた睦子は只だ眼を睜つたばかりで呼吸が吐けなかつた。



「まあ呆れた子だね」とお浪は言った。

「虚榮の女だ、驚いた、實に驚いた」と橋本は唸つた。

「慙うなつて見ると此儘にして萬龜さんの望を叶へさせるより途がありません」と櫻井は言つた。而して克巳の顔を見やつて、

「森川君、君は？」

「どうでも可い」と克巳は投げる様に言つたが、

「お先に失敬」と帽子を取つて外へ出た。

「小母さんも姉さんもお淋しいから私此家へ宿るわ」と蝶子は言つた。

元より睦子は心から厭な事であり、其れに萬龜子が拔駈をする程父の許へ行きたいなら其れに越した事は無いと母は思つた。彼女は寧ろ二人の姉妹が望み通りになつた事を喜んだ。橋本は無論異議はなかつた、獨り櫻井は首を傾けた。平素から推してもそんなに虚榮の女ではない、其れが今ま掌を返した様に行つたといふは合點がゆかぬ、女といふものは飾る事が巧だから平素の行爲を見たばかりでは、真相が解らないものだと思つた。睦子と雖も萬龜子の此の手紙以

外に別な意味があらうとは什麼して想像し得やう、若し妹が克巳に戀をして居るのだと知つて居たら、妹の脱走には辛い涙があるのだと判断し得やうが、二人の心を知らない睦子は、此手紙にある通り妹は只だ贅澤な生活がしたさの餘りに此の擧に出でたのだと思ふより他はない。爾思ひつゝ、彼女は妹の前途を氣遣つた。

「心にもない厭な養子を取つて一生何の慰安もなく暮らしてゆく心細さを何故考へなかつたらう、私に相談してくれれば私は何が何でも妹の不幸になる事だから制めるのだつたけれども其れも是れほどまで財産が欲しいなら制めやうもない」

慙う思つて彼女は我が身の如く深く悲しんだ。蝶子には他の人達の様に深い想像もなければ判断もなかつた。が彼女は只だ不快であつた。お金が欲しいからと言つて動いて行つた女の心狀を卑しいと思ひ其れに比べると姉さんの方が遙に人格が高いと思つた。

淋しい思ひを懷いて櫻井と橋本はホールを出た。

「虚榮の女か」と橋本は腹立たしさうに呟やいた。「芝居や小説にある様な女が世間に幾らもあるもんだね」

「女には何が一番大切なんだか解らなくなつて来た」と櫻井は歎息して、「俺は今夜は眠られん」

「なぜだ」

「森川が氣の毒で堪らん」

「森川？うむ……だが女を戀するなんて愚な事だ」

「爾は不可よ、失戀ほど心苦しいものはないよ、生涯それが心の傷になるんだから」

「併し森川は失戀のために荒むなんて、其那へナチヨコ野郎でないよ」

「へナチヨコでなくても苦むよ」

「森川はそんな男でない」

「君と森川とは異ふよ、實に氣の毒だ」

「俺は氣の毒とは思はん、下らん事だ、戀？戀なんて馬鹿々々しい畠の肥料にもならん戀だらう」

「そんな事を言はずに親身になつて相談してくれよ」

「俺に戀の相談をしたつて駄目だよ」

「兎も角も運動場を一巡しよう」
「可からう」

一六

二人は運動場に入つた。雨後の月は隈なく晴れて家々の屋根は硝子の様に光つて居る、向ふの目白臺は狭霧に鎖されて白濛々の中に窓々の火が處々沫されて漏れる。

「處でね、此處に一つの問題は」と櫻井は帽子を前のめりに被り直しながら言ふ「君は氣が付くまいが陸さんが森川に戀をしてるよ」

「又た戀の話か、驚いたね」

「驚かなくても可いよ、兎も角も聞け」

「うむ兎も角も聞くよ」

「陸さんが戀をしてる、其れは可なり突進んだ戀だ」

「おい突進んだ戀だの、退却した戀だのつてそんなに種々あるのか」
「まあ聞けよ」

「うむ」

「若し森川が萬龜さんを諦めて睦さんを愛する事が出来れば是ほど喜ばしい事はないのだ」
「つまり補缺だね戀の補缺かね、野球と同じ事だ」

「困るな、野球の話をしてるんぢやないよ」

「あゝ爾か、戀の話のつもりだつたね、處で什麼した」

「其れだけの事だよ、睦さんと結婚が出来れば可いのだ」

「譯のない事だよ出来るッ」

「出来ると思ふかね」

「うむ大丈夫出来る」

「どうして君は爾思ふか」

「男と女だ、夫婦になれないといふ法があるものか」

「君とは話が出来ん、逆も駄目だ」

「駄目なのは解つて居る、無理に話し込む君が悪いのだ」

櫻井は苛れたさうに帽子を脱いで「振二振振つた。と橋本は選手腰掛の方を見て櫻井の袖を引いた。

「彼處に居るのは森川ぢやないか」

「うむ森川だ」

いかにも腰掛に腰を落して腕を拱んだまゝ茫然と考へて居るのは森川であつた。彼は睦子が讀だ手紙を聞いた時兩耳ががんと固まつて頭が石になつたかと思つた、萬龜子が金が欲しさに養子を迎へる！そんな事が夢にだに想ひ得べき事であらうか、殆んど八年の間、自分が中學に通ひ彼女が小學に通つて居た時から兄弟の様に互に喧嘩しながらも心の中では親んで居た。たつた二度の散歩！其れでも互の心と心は既に良人よ妻よと許したのである。縦令此の早稲田のグラウンドが一面の海となつて目白に波が泡立つ時があるにしても、萬龜子の無邪氣の純潔な心持が黄金の爲に汚れやうとは想像し得ようか。

青年は未来のために生きて居る者である、克巳の未来には功名あり富貴もあり而して美しく賢い妻が微笑して立て居たのである。其れが一朝にして：：爾だ一朝ほんの一瞬の中に消え去つた。純なもの不純となり清いものは泥塗れになり玉が瓦になり了つた。彼には未来がなくなつた。あるものは只だ欺かれた屈辱と誰に漏らす事も出来ない鬱勃たる苦惱ばかりである。

「どうしてもく信じられん」と彼は夢を辿る様に獨で言つた。

「萬龜さんが去つた、萬龜さんが俺を捨てた、そんな事はあるべき筈がない、だが其れが事實なのだ、事實である以上は何するか、俺は何すれば可いんだ、さあ其れだ、俺は何すれば可いんだ」

彼の心は殆ど名状しがたい混雑さを以て満身の血を緊めつ緩めつ熱しつ冷しつした。

「どうした」と櫻井は彼を驚かすまいと靜かに言つた。

「俺は何なる」と克巳は櫻井の腕を掴んで言つた。

「櫻井、俺は死ねば可いのか生きてれば可いのか教へてくれ、おい櫻井其れを教へてくれ、死ねと言てくれ、死ねと：：死ねと：：言つてくれ」

「苦しからうな」と櫻井は友の頭を我が胸に抱き寄せて涙をほろく」と零した。

一七

初戀と痲瘡は人間の必ず通過しなければならぬ關門である。満足に行くものは明るく美しく坦々と過ぎるが一つ躓くと生命を失ふ。克巳は今生死の境に立つた。實際彼は此の際如何に自分を扱つて行くべきか、解らなくなつたのである。

「どうすれば可いのだ、死か生か教へて呉れ」

櫻井は慰めやうがなかつた、之が普通の遊蕩兒であるなら「諦めろ」とも言へよう、諦める事の出来る様な輕卒な戀は車夫もやる馬丁もやる不良少年もやる。だが眞實を以て生きて居る我友森川克巳の戀はそんなものでないと彼は知つて居る。彼は答へる術がなかつた。

「確乎しろ馬鹿ッ」と橋本は怒鳴つた。「見つともないぞ、何を泣くんだ、多寡が女一疋の事ぢやないか、櫻井貴様も何んだ、泣いたりなんかして馬鹿ッ」

「何が馬鹿だ」と櫻井は怒った。

「馬鹿ぢやないか、世界中に女がないぢやなしさ、女が欲しくば俺が今ま直ぐにも伴れて来てやるわ、戀だの愛だのハイカラになるから弱蟲になるんだ」と橋本は洋杖で腰掛を叩いた。

「貴様には解らんよ」と櫻井が言ふ。

「解つてるよ貴様達は色情狂だ」

「何だ馬鹿」

「貴様こそ馬鹿だ」

「おい橋本！」と櫻井は涙に塞つた聲で言つた。

「貴様は親友一人が脊負ひきれない苦みに悶えてるを見て同情がないか」

「親友だから言ふのだ」と橋本は叫んだ。「おい森川！貴様はいつ其那だらしのない人間になつた。おい、貴様は俺の顔が見えんのか、橋本達郎だ、俺は平素貴様を兄貴と呼んで居た。實際學問から言つても智識から言つても人格から言つても貴様は俺の兄だ。俺は世界中の誰をも恐れぬが貴様ばかりが恐いのだ。俺は何處へ行つても貴様の自慢をするんだ。俺の兄貴に森川

克巳といふ奴があると吹聴して居るんだ。其れが貴様！おい貴様！其れが女に逃げられて死ぬか生きるかに苦んで居るなんて其那事が世間に言へるか、貴様達は其れを失戀だといふ。失戀？そんな言葉は武士道の盛な昔の日本には無かつたぞ、女郎に振られ首を縊つたのは昔の素町人ばかりだ。失戀といへば立派な事の様だに思つてるんだらう、俺は其れが癪に障る、男てえ奴はな女がなくなつて生きて行けるんだ。可いか、女に振られて泣面を搔いてるのが男の名譽か、男は男に惚れられれば可いんだ。女なんて下等な動物に惚れられたつて寧ろ恥辱だ。恥知らずめ、ババ馬鹿野郎」

「橋本、静かにものを言へ」と櫻井は窘なめる様に言つた。「貴様は其那事を言つても解らないが、男だつて女だつて愛情に違ひなからう、什麼だ」

「其れや違ひない」

「男が男を愛すれば、友になるんだ、我々三人の様になるんだ、生命を捨てる氣にもなるんだ、貴様は森川のために生命を捨てる氣にはなれんか」

「なる、なる、大いなる、そんな事は貴様に訊かれんでも解つてる」

「爾だらう、爾だ、其れは貴様と森川が親友だからだ、男同士が惚れ合つてるからだ」

「然り大いに然り」

「だが男と女と愛すれば其れは何だ」

「親友だ、女だつて親友だ」

「爾だ、其通りだ、だが其場合には名稱が違つてくる、即ち親友一名夫婦といふものだ」

「然り、大いに然り」

「然らば男女の愛は友を求むる自然の情だ、親友を求むるのだ、男の親友もあれば女の親友もある、其れを貴様は否認するか、否認すれば貴様と森川も親友でなくなる道理だ」

「うむ」と橋本は行塞つて唸つたが「其れなら許してやる、だが親友といふ奴は振つたり振られたりしないぞ」

「考へて見ろ、野球の選手は皆な親友だ、其中の一人が寝返りを打て敵方に従いたら貴様口惜しくないか」

「其りや口惜しいよ、俺は其那奴は撲り殺してやる」

「口惜しいだらう、爾だ、森川が萬龜さんに逃げられたのは親友が裏切したと同じだ、親友を失つた悲しみだ、之を稱して失戀といふのだ」

「爾か、解つた」と橋本は躍り上つて叫んだ。

「可しく大いに可し、失戀！可し、森川失戀に泣けッ、大いに泣け、口惜しからう、俺も泣いてやる」

落椿

—

十年の苦勞を一夜に仕盡すものは失戀の第一夜である。森川の前には希望がなく光がなくなつた。死に似たる冷たい黒い幕が其の五體を裏んで聳々と迫るのは只だ自らを嘲る心と自らを憫れむ心と混淆した取止めのない屈辱を感じる心である。

早く我戀を打明けなかつたのが悪かつた。打明けさしたら必ず彼女は父の許へ行かなかつたであらう。

いや其れは同じ事だ。打明けても彼女は逃げるだらう、彼女と俺とは口でこそ約束を結ばないが心で既に互の愛を語つたのだ。其れに逃げたといふのは彼女は黄金に眼が眩んだのだ。彼女の望む處は只其れであつた。

逃げるものを追ふ様な未練がましい心は更にならない、虚榮の女を妻とした處が早晚必ず逃げて行くものとすれば一日も早く解つたのがせめてもの幸福である。然るに其れが什麼して慥う腹が立つだらう。女に未練がないのに腹が立つべき理由がない、だが矢張り腹が立つ。

森川は自らを吐り自らを責め自らを罵つた、而して此の屈辱を一日も早く忘れたいと努めた、凡そ彼の眼に觸るゝあらゆるものは悉く自分を嘲るかの如くに見ゆる、同級の學友、往來の人櫻井や橋本、妹の蝶子までが何となく打解け難いものに見ゆる。彼等が同情めいた言葉を吐く時には猶ほ更自らを敗殘者扱にするかの如く思はれる。

彼は五六日—或はもつと多くの間—一室に籠つて一切外出をしなかつた。机の前の障子を見詰めて一日を暮らした事もある、飯も不味い、話す事も厭だ。笑ふ事は更に厭だ。獨り氣を揉んだのは、妹の蝶子であつた。頃は兄さんの機嫌が悪い、何を言つても返事をせね什麼いふ事情かは知らないが、終夜坐つて物思ひに沈んだり、湯にも入らず外へも出ぬのを見ては小さき胸を痛めずには居られない。

「兄さん什麼なすつて？」と彼女は一日慥う訊ねた。

「什麼もしない」と克巳は言つた。

「だつて今日は御飯を食らないぢやないの」

「うむ」

「學校へも被行やらないぢやないの」

「うむ」

「私にだつて一遍もものを言つて下さらないぢやないの」

「慙う言つた時蝶子は悲しくなつて眼を袂で蔽ふた。

「何を泣くか、馬鹿」と克巳は叱つた。

「だつて私淋しいんですもの、學校から歸つても話らないわ」

克巳は黙つて妹の顔へる頭を見詰めた二つに分けた、眞中の髪の毛の地肌が美しく白く見える

其の上にリボンの蝶々が動いて居る。

「ぢやねえ兄さん、今までの様になつて下さつて？」

「うむ」

「御飯を食へて？」

「うむ大いに食ふよ、今日はお前と遊ぼう」

蝶子は嬉しさに涙を拭いた、而して久し振で洋絃を出して弾き且つ歌つた。

「兄さんはもうお厭？」と雲時あつて蝶子は言つた。「何か別な事をしませうか」

「うむ」

蝶子は次に闘球盤を出して弾き初めた、二三回の勝負があつた後又た言つた。

「兄さんはもうお厭になつたでせう、外に何かしませうか」

彼女はまだくくと兄の顔を眺めた。

「蝶ちゃん」と彼は何か考へてゐたが全く別の調子で言つた、蝶子は答へなかつた、而して黙

つて裏口へ出た。裏口の小屋の中で爺やの茂平が唐臼を搗いて居た。

「何を泣いてるだね」と爺やは足を停めて言つた。蝶子は黙つて居る。

「兄様が什麼してるかね」と茂平は唐臼を降りて蝶子の顔を覗き、

「矢張り何かね、學校へも行かずに鬱ぎ込んで被居しやるだかね」

「え」と蝶子は心配さうに爺の顔を見上げた。
「可しく」と爺は舌打して、俺あ異見してやるべえ」
「駄目よ爺や」と蝶子は言った。
「駄目ちう事は無えだ」と茂平は前を拂つて又た首を傾けた。

二

茂平が何事か考へ込んでる中に蝶子は黙つて外へ出た。
「何んちう事だ」と茂平は呟いた、而して積藎の上に腰を落して霎時煙草を喫かした。丈夫でも最早や六十の坂を越して居る。頭の脳天は禿けて湯氣の様にほやくと疎らな髪が立て居る。勞働と苦勞に寝れた老の皺は深く顔に刻まれ古びた皮膚の色さへ凋落の近づくを示して居る。
「一イニウ三イ……」と彼は骨太な指を折て數へ初めた。彼は今ま克巳と蝶子の年を數へたのである。彼が克巳の父に助けられて佐渡の鑛山に賣られて行く危急から遁れ得たのは彼の十六

歳の時であつた、それから此に五十年一生を恩人の奉公に捧けて忘れ形見の兄妹までも引取つたもの、米搗や、粉挽百姓仕事だけでは逆も二人を養育する事が出来なかつた。
克巳の父は豪農として有名なものであつたが、晩年親類のために欺かれて自分の知らぬ負債を脊負ひ込み頭恢復の時なくして死んでしまつた、彼の死際には薄情な親戚や知人は一人も見舞に來なかつた、彼は下男の茂平を枕元に呼び、二人の子を指さしたまゝ眼を眠つた。
「安心さつしやい、お二人は茂平が引受けますだ」
彼は恙う恩人の屍に向つて言つた、遺産としては僅に一段歩の田地と保険金が二千圓ある許りである。茂平は決して一文も是に手を付けまいと誓つた。彼は朝の黎明から日暮るゝまで働いた、而して兄妹二人には一切生活向の事を言はなかつた。
「お金は幾らもあるから、うんと學問さつしやい」と彼は毎も言つた。だが老いたる彼の力には限りがある。女學校や大學校へ二人を通はせるには什麼しても年々遺産を喰ひ込まざるを得なかつた、保険金の二千圓は空しくなつた、一段歩の田地も抵當に入れざるを得なくなつた。
「坊ちやんが大學を卒業さへすれば一文無しになつても構はない」

彼は憊う覺悟を決めた、然るに頃日の坊ちゃんの状態は變つて來た。蝶子の心配と彼の心配とは同じものである。

茂平が縁先へ出た時に克巳は茫然机に凭れて顔を腕の間に埋めて居た。

「坊ちゃん」と茂平は縁に上り込んで行儀正しく坐つた。

「何だ爺や」と克巳は澁々に言つた。

「坊ちゃんは頃日學校へ行きませぬね」

「うむ」

「何んだつて行かねえだね」

「休みだよ」と克巳は煩ささうに言つた。

「いんにや休みぢやねえだ」と茂平は障子をがらりと明けて「本氣で其那嘘を吐くだかね坊ちゃん學校は休みぢやねえ、櫻井さんと橋本さんも皆な毎日行つて被居しやるだ、其れにお前さんは何故に休みなさる、俺お御父様に申譯が無えだ、なあ坊ちゃん俺お前様が竹馬に乗つた時からお前様をお預かり申した、そんな嘔吐きの怠け者にしようと思つて育てやしねえんだ、



今ま坊ちゃんが途中からソレ出した日にや取返し付かねえ事になるだ、たつた一人の御嬢様をどうする積だね」

「爺や」と克巳は苦々しげに言つた、

「僕の事に構つてくれるな」

「いんにや構はずにや居られねえ」

「休みたい時には休むんだ、彼方へ行け」

「いんにや行かねえ」と茂平は膝行寄つて涙をはらくと零し

「坊ちゃん、明日から食ふ米が無くなるちうにお前様はよくも〜其那々々」と言ひ掛けて聲を呑んで泣いた。

「米が無くなる？金は幾らでもあるだらう」

「もう何んにもない、それも今ま二月や三月は何もともなる、お前様の卒業までは爺やが土を嚙つても餓しい思ひをさせやしねえが、それから後は……」

「金はないのか」

「なんにもねえだ」

「恚う言つて茂平は一家の事情を初めて打明けた。」

三

聞く事毎に克己は驚いた。十餘年間の茂平が忠義！其日々々の苦しき生活、而して今まで其れとも知らずに暢氣に遊び暮らし無駄遣をして來た事、次で蝶子の今後の處置！

「凡てが俺の責任だ」と彼は突然叫んだ、爾だ、凡てが俺の責任だ、俺は愚圖々々して居るべき場合でない、若し今期を落第すればもう二度と學校へは行けなくなる、妹を養ふ事が出来なくなる、労働者の群に入らなければならなくなる、而して森川の一家は遂に再興の機會がなくなる。

「恚うして居られない」と彼は言つた。

「有難え、氣が付いて下されば俺は死んでも構やしねえだ」と茂平は嬉し涙に泣いた。

「勉強するよ、爺や、僕は屹度お前に安心させるよ、なあに學校を卒業さへすればね、お前と蝶ちゃん二人位は引受けられるからね」

「親類の人達を見返してやつておくんさい」と茂平は老の眼を輝かした。

茂平は去つた、聽て歎かれた聲で田舎唄を唄ふ聲と唐臼の落る音が聞えた。

「あゝ、お前一人かよう連れ衆ないかよう——」

克己は泣然と涙を垂れた、俺達二人を人間にしようと思つて生涯を抛つた爺やの心に對しても俺は奮發しなきやならん、戀は何んだ、女は何んだ、萬龜子は何だ、俺には妹がある爺や

がある、二人を餓死せしめたら俺は男でないのだ。

豁然として谷を出で、廣い青田を見渡した様、彼の責任觀念は彼の濃霧を驅逐して得知れぬ勇氣と輝やかしい光が彼の胸に溢れた。

「俺は今まで什麼したんだらう」

彼は明け放した障子から軒に迫る青天を見やつた。此時蝶子が靜かに憚る様に入つて來た。

「蝶ちゃん、安心してくれ、兄さんは勉強するぞ」

蝶子は疑ふ様に兄の顔を睨めた。

「兄さんは悪い夢を見て居たのだよ、遊ばう久し振で遊ばう、大いに愉快に暮らさう」

半信半疑の蝶子の眼は固定した様に動かすなつたが、次第々々に光を帯びると到頭涙が充満に湛つた。

「嬉しいわ」と彼女は兄の胸に抱付いた、而して霎時離れなかつた。

「さあ遊びに行かう」と克巳は言つた。

「えゝ行きませう、睦子姉さん處へ行かなくつて？姉さんが心配してるから」

「うむ何處へでも行かう」

二人は互に微笑して家を出た。久し振で牛乳ホールの店へ行くと櫻井と橋本は碁を圍んで居た。

「おい什麼した」と櫻井は心配さうに言つた。

「なあに悪夢だつたよ」と克巳は快然として言つた。

「豪いッ」と橋本は叫んだ。其處へ睦子が歸つて來た。彼女は克巳の顔を見て刷と耳を染めた

が靜かに會釋して奥へ入つた。

「只今！」

「あら、もう歸つて來たのかへ、什麼して？」とお浪が言ふ。「御婚禮に行かなかつたのかへ」

「いゝえねお母さん」と睦子は力なく火鉢の前に坐り灰を掻き均しながら「私行かなきや可かつたと思ふわ」

「什麼して？」

「萬龜さんはね、此儘歸つてくれつて言ふんですもの、御手傳旁ね、お前の一生の御祝儀だ

から見て行きたいと言つたらね、姉さんに居られると困る事があるからと爾言ふのよお母さんにも来て貰ひたくないつて其儘奥へ入つて了つたのよ」

「呆れた子だねえ、御父様の許だし其れにお金持になつたからつて高慢になつたんだよ屹度、そんな處へはもう二度と行かない方が可い」と母は半ば宥める様に半ば腹立たしく言つた。

「いくら姉妹でもお嫁になるともう他人になつてしまふのね」と睦子はほろりとして袖を噛んだ。

四

克巳は黙つて店を出た。櫻井と蝶子が呼びとめたが聞えなかつた。

「今日が結婚日！」

一天拭ふが如く晴れ渡つた克巳の胸に又しても黒暗々たる雲が湧き出した、妹と茂平に對する責任から反抗的に燃え出した光は脆くも挫けて、

「今日は彼女が確實に他人の所有となるのだ」といふ考が鋭どい鋭どい鋒の如く彼の心を刺す。どんな顔をして白粉を塗り髪を結び婚禮服に着替へて居るだらう、元より我が戀は知る由もなからうが、贅澤を盡した小座敷で周圍の笑聲軟語に取巻かれて若やかな美しくさを矜るは今ぞと例の嬌然な顔に少し含羞を帯びて居るであらう、丁稚小僧其他出入の人々は驚異の眼を以て彼女の美しくさを讚美して居るであらう、而して彼の良人たるべき男は得意満面に祝賀の人の羨望の的となつて居るであらう、時計の針は何の遠慮もなく進む、一生に一度の——終生忘るべからざる式が今現に日比谷の大神宮で行はれつゝあるのだ、此の一時間が彼女を人の妻といふ肩書の下に奪ひ去る、同時に俺は敗殘者の名簿に登録されるのだ。もう來ない、二度と來ない、彼女の處女時代は永久に去る、而して俺の希望も永久に消えるのだ。

克巳は只だ眞直に歩いた、自分が何處を什麼して歩いたか解らなかつた。雨は名残なく晴れて何時の間にか町並に灯が點つて居た、一二度彼は知人に逢つた、併し彼は挨拶もしなかつた、只だ眞直に歩き續ける。二月の風は寒かつた、彼は外套の襟を立てたまゝ、兩手を衣匣に突き入れた。

不圖氣が付くと彼は落合街道を歩いて居た、一週間前に萬龜子と共に散歩した野路が眼前に展開する。

「あゝ是は何麼した事だらう」と彼は呟やいた、而して矢張足を停めなかつた、野路は段々昏れて来た。月の出には未だ早い、向ふの森に灯がちら／＼見え初めて、暗がりの中を無提灯で行く荷馬車は突然と彼を驚かしたり又た背後から通り過ぎたりした。

「此處を二人で歩いた時には萬龜さんは嬌然して呼吸を窘ませながらも少し緩くり歩きませうと言つたつけ」と彼は思つた。

「馬鹿ッ今更其那事を思うて妹や爺やを什麼する」と彼は自分を罵つた。彼は堤を下て軌道に添うて歩いた。鼻から先は眞暗である、併し彼の眼には極めて鮮かな彼女の姿が現れた。自分の前になつて行く彼女の後姿！房やかな髪、少し横を向くと柔かに美しい耳朶とふつさりとした額頭の毛、子供らしく茸々と生えた頸の生毛、其れから針を刺したら血が五六尺も逆りさうに豊かに薄紅の頬、上品な如何にも女らしい鼻、紅い唇其等が一つ／＼に判然と浮んで来る。

「髪針が動ともすると落ちさうになるを俺が背後から近づいて刺してやると、其度毎に魅入る様な咬る様な眼を以て俺に感謝したつけ」

「馬鹿ッ／＼／＼」と彼は再び自分を叱つた、森川！貴様よりも黄金を重しとする女を思うて什麼するのだ。

とつぶり日が暮れると其處此處の隅々から霧が立ち初めた、始めは遠くて模糊と白んだが何時の間にか擴がつて森も屋根も霧の海の中に巻き込まれてしまふと白さが次第々々に濃くなつて足元まで覺束なくなつた、汽車の線路：：兩側の崖に介まつた一筋も見えなくなつた。線路の遙の向ふにシグナルの赤い灯が茫と黄ばむだ光を抛けて居る。光は風に吹かるゝ霧のために時に明るく時に暗く又た突忽として赤と黄の圈を二重にも三重にも霧に描くのであつた。

彼は何處までも歩いた。と躰て月が出た。

彼は黙つて堤に腰を下した。恐ろしく寒い、耳と鼻先が凍えさうに寒い、併し彼の顔は熱して居た。彼は月に明るさを増す霧を見やりながら凝と考へた。

「二人が戀を語るべくして語らなかつたのは此處だ。何故俺は語らなかつた。あの時萬龜さん

の肩と俺の肩とは相觸れて互の體温が胸の鼓動と共に通うて居たのだ。其れを俺は……」
彼は繰返し／＼當時を思ひ續けた。而して又た自分を罵つた。彼の頭は鉛の如く重くなつた、
重い底に種々な悲哀や不平や後悔や屈辱が渦巻いて居た、ものゝ一時間も彼は其處を動かかなか
つた。

汽笛の聲を聞いたと思つて彼は立上つた、而して又もや歩いた、背後から一二度又もや汽笛
が鳴つた、彼の耳には確に聞えた、が彼は其れを聞流してしまつた。雷は彼の足元を包んで恰
から雲を踏む様。

「あの時は暖かつた、夕日の色が美しかつた」
突然轟然たる音が彼の耳元に聞えた。彼ははつと思つた。途端に彼の身體は空に煽られた。
汽車は消魂しい笛を鳴らして停まつた。

五



半死半生の克巳の身體は鐵道員の手にて依て附近の醫者の許へ運ばれた。報知に接した蝶子は茂平と共に驅け附けた、睦子も櫻井も橋本も来た。是が若し汽車に轢かれたのであつたら無論即座に死んだであらう。併し克巳はほんの擦れ違ひに過ぎなかつた、外套の一部と腰の一部が何處かに打たれて突風のために跳ね飛ばされた時に崖に脚と腦とを打つた。左脚は骨膜に達する傷を負ふた。後頭部は二ヶ所の疵口から血が流れて草を染めた。

「餘程の重傷ですから」と醫師は手當をしながら心配さうに言つた。

「助かりませんか？」と蝶子は蒼白になつて訊ねた。

「助からない事はありませんが」と醫師は全然死んだ様に横はつて居る克巳の呼吸に氣を配つて言つた。

「助からない事があるもんか、屹度助かるよ、ドクトル君、爾だらう、助かるだらう」と橋本は脅迫する様に言つた。

「さあ、何しろ重傷ですからな」

「重傷だから助かるといふのだよ、爾大丈夫助かるぞ」と橋本は負けずに言ふ。睦子は殆ど

顔色が無かつた、彼女は辛と櫻井の肩に掴まつて身を支へた。櫻井は九分通りは恢復の見込がないと思つた。彼は自分の驚愕や恐怖を感じるよりも第一に考へたのは蝶子と睦子の事であつた。女だから卒倒しはしまいか、病氣を引起しはしまいか、彼は只だ其ればかりが心配であつた、で橋本が暢氣らしく屹度助かると言ふのを聞いて縱令其れが一時の氣慰めに過ぎないと思ひつゝも能く言つてくれたと心の中で感謝した。茂平は何にも言はずに黙つて首を低れて居たが、

「御先祖様が護つて下さるだ」恚う言つて口の中で何やら唱へた。

だが櫻井が心配したに拘らず蝶子の態度は案外に靜かであつた。彼女は兄の呼吸を聞き又た顔色を見詰めてる中に什麼しても兄は死ぬとは思へなくなつて來た。「私達が生きて居るのに兄さんばかりが死ぬべき筈がない」

恚う言つた風の極めて漠然たる考へではあるが、此儘に永い別れとなるには餘りに人生が無意味で慘酷である様な氣がしたのである。殆んど一時間餘りも五人は沈黙した、而して各自に種々な空想に驅られた。

「痛いとか苦しいとか何とか一言でも仰有やつて下されば可い」と睦子は思つてた。只だ前後も知らずに眠るだけでは實に心細い。

橋本の奔走に依つて有名な醫學博士達も來た。負傷は左程でもないが腦震盪は甚だ氣遣はしと言ふ意見は何れも一致した。而して明日までの模様を見て病院に移すや否やを決しようといふことになつた。留守が心配だからといふので人々は強ひて茂平を歸宅せしめた。四人は枕元に坐つて此の生死を判たぬ人を看護した。稀に克巳は深い呼吸をした。又は唸る様な聲を出した。其の度毎に人々は何となく頼母しい思ひをして互に顔を見合はすのであつた。曉方になつて克巳の唸りが段々多くなつた。而して口の中で何やら呟やく様になつた。

「占めたッ」と橋本は言つた。「もう大丈夫だ」

「愚う言つて彼は克巳の耳に口を寄せた。」

「森川！森川！」

「うむ」といふ極めて微かな聲が聞えた。

「俺だ、橋本だよ解つたか、蝶子さんも睦子さんも櫻井も此處に居るぞ」

克巳は手を動かして撈る様にしたが其はほんとの指先だけで高く擧ぐる事は出来なかつた。「兄さん、私よ、蝶子よ」と蝶子は言つた。而して兄の手を握つた。握られた兄の手には確かに握り返す力があつた。

「あゝ助かつた」と蝶子は初めて涙を零した。

「睦子姉さん握つて見て頂戴！」

睦子は直ぐに蝶子に代つた、靜かに握ると微かに握り返す、指の温味より生の力が呼吸をして我が手に何事かを與ふる様に思はれた。其れは恰度、
「俺は生きてるぞ」と言ふかの様。睦子は何時までも手を離さなかつた。

六

翌日克巳の身體が擔架に載せられて大學病院に運ばれた。櫻井と橋本は擔架に従いた。「大丈夫だね」と橋本は歩きながら言つた。

「さあ癒るには癒るとしても腦をやられたんぢや變な事になりはせんかね」

「痴呆になると言ふのかへ」

「うむ、其れがさ……」

「何を言つてるんだ、森川に限つて其那事はないよ」

「怒う言つたもの、橋本は智識上の事に就ては平素櫻井に一目を置いて居るので、「痴呆になつても助かりさへすれば可いよ、俺達は何までも保護してやるんだ、爾だらう痴呆な兄を有て生れたと思へば可いだらう」

「僕等は其れで可いが、蝶ちやんと睦子さんがね」

「うむ、それや困るな、うむ成程、それは實に困るな」

二人は染々と語つた、櫻井は殆んど常人の考へる事が出来ぬ將來の將來まで考へて居た。縦令ば克巳が死んだ場合には是れくの方を取らう、痴呆になつた場合は怒うく、只だ足だけが不具になつた場合には怒うく、此の學期試験は怒うして、病氣が長びけば怒うするといふ風、其の順序が極めて精密に確乎たるものであつた。橋本は一々驚歎と感謝を以て聞いた。

「萬止むを得なかつたら君は蝶ちやんの世話をしろよ、僕は森川を引取つて睦子さんと夫婦にしてやる」

「痴呆になつたら夫婦になれないぢやないか」

「痴呆になつても狂氣になつても睦子さんなら屹度喜んで森川に生涯を捧げるよ」

「うむ」と櫻井は首肯いて「併し其れは慘酷だ」と呟やいた。二人の後になり前になり擔架は黙々として歩いて行く。

病院へ移つてから克巳の容態は少しく險惡になつて來た。

「痛い」と彼は續けさまに叫んだ。而して床の上を悶搔き廻つた。蝶子と睦子は顔を掩ふた。

「可しく」と、博士は小兒を扱ふ様に優しく言つた。「痛さが解ればもう占めたものだ」

眠つたかと思へば覺め、覺めたかと思へば又た譫言を續ける。體温や脈搏や呼吸は毫しも一定しなかつた。其夜から二人づゝが交代に看護する事にした。だが睦子だけは決して傍を離れなかつた。

「長引くかも知らんがもう心配な事はありません」と醫者が言つたのは一週間も後であつた。睦子は強て蝶子を學校へ通はしめた。櫻井も橋本も學校があり野球の練習があるので夜だけ看護する事となつた。茂平は毎日見舞に來た。而して三十分間許り黙つて克巳の顔を見成り、其れから歸りしなには毎も「御先祖様が護つて下さりますだ」と言ふのであつた。

睦子は朝の七時頃から正午頃まで看護婦と代つて眠るのみであつた。彼女は詳らかに看護婦の状態を知る事が出來た。

凡そ今日の看護婦ほど始末に終へないものはない、彼女等の十中八九まで、懶惰で片意地で傲慢で冷淡である、彼女等は病人の日誌に脈搏と體温と便通と食事とを記すのみである、一定の時間に體温器を挿む、服薬を勧める、繻帶や氷嚢を取替へる、仕事と言へば其れだけである。彼女等は患者の心理や氣分や感情に就ては毫も考へない、官立の病院すら其れである。所謂看護婦會など、稱する商賣本位の看護婦の如きは如何なる家庭に於いても信用を失ひ蛇蝎視されるのも無理はない。彼女等は患者は人間である事を忘れて居る。而して肉に於て惱み感情に於て惱める者に對しては同情と憐愍を持たなければならぬといふ看護婦特有の天職の意義を忘れて居る。

て居る。

「患者に氣を御遣ひなさるから随分苦しいでせうね」と睦子は一日看護婦に怨う言つた。

「いゝえ」と看護婦は答へた、「一と月の中に幾人となき變る患者さんですもの一々同情をして居た日にや死んでしまはなきやなりませんわ」

睦子は愕然した、是が最も正直な告白に違ひない、併し其れで看護婦が勤まるだらうか。彼女の頭に極めて大きな問題が起つて來た。

七

一週間は過ぎた。克巳の容體は依然として好くもならず悪くもならなかつた。睦子は到底看護婦の力を頼む事の無駄である事を覺つた。朝から正午までの五時間の睡眠時間を三時間に縮めた。彼女は段々瘠せ出した。時には眩暈を感じて倒れさうになる、併し彼女は決して克巳にも他の人々にも疲勞の色を見せなかつた。

最も良好の時には克巳は我儘を言ふ、苛れ出す、怒鳴るのであつた。其れが却つて睦子に嬉しかつた。無理を言はれれば言はれる程克巳の精神が恢復して來たのだと思つた。一夜彼女は眠れる克巳の顔を凝と見詰めて居た。極めて楽しい前途の光が自分を待て居る様な氣持になるかと思へば又た俄然として暗黒の底に落された様な氣持になる。どうしても癒さなきやならない、生命に代へても癒さなければならぬ。

彼女は悄然と眼を開きながら幻影に捉はれる事が屢々あつた。先づ克巳と夫婦になる、自分が赤兒を抱て居る。赤兒の頭に眞白な柔らかな毛の帽子が動いて居る。彼女は今ま何か用があつて外出しなければならぬ處であつた。私が抱くからお前は出てお出と母が言ふ。私此の子を抱て行きますわと自分が言ふ。風邪を引かしては悪いと母が言ふ。そこで自分は良人に訴へる。ねえ貴方此の子を伴れて行つても可いでせうと言ふ、次の室から克巳が答へる。「俺も出るから一緒に行かう」

「貴方は今ま何をして被居しやるの？」

「僕は今ま足を繻帶してゐるんだ」

そこで彼女は幻覺から覺めた。克巳は依然として眠つて居る、蒲團の裾から繻帶の足が露はれて居るのに氣が付いた時彼女は悲しくなつた。

「早く癒らないものだらうか」

早く癒つて卒業して……と彼女は數へる中に又しても彼女の妄想が果てしもなく擴がる。而して疲勞が彼女の全身を襲うて彼女はうとくと假睡むのであつた。

實際彼女の全生命は只だ克巳の上にあつた。彼女は今まで人の死といふ事を考へた事もなく神や佛の事も考へた事はなかつた。だが彼女はあらゆる神に祈つた、什麼な惡魔でも森川さんの生命の代りに私を取ると仰有るなら私は何時でも身體を捧げますと言つた。

十日は経た。克巳は次第に恢復しかけた。十五日二十日と経つ中に彼は全然意識を取戻した。或夜克巳は不圖眠から覺めた、病院の夜半ほど物靜かなものはない、彼は間然たる此の古寺の様な靜かさに充たされた一室を薄暗く照らして居る電燈を眺めながら自分の過去や目下の状態を回顧した。其の中に彼は渴きを覺えた。臺の上の吸吞を取るには手を伸ばさねばならぬ。と見ると睦子は自分の寢臺の端に頭を低せたまゝすやくと眠つて居る。看護に寢れた額に婆婆と

後れ毛が掛つて鼻筋が透徹る様に瘠せて居る。無雜作に束ねた髪にクロローバの簪を挿してあるが其の脚が歪んでニツケルが眞鍮色になり、鏤めた青貝が脱れて黒い斑点が残つて居る。克巳は凝と其れを見詰めた。

「氣の毒だなあ」と彼は言つた。

「僕は什麼して此の女に看病されて居たんだらう、今まで其れに氣が付いて居たに相違ないが何故斷わらないんだらう」

彼は益々睦子の寢顔を見詰めた突然として彼の胸に重苦しい痛みが迫つた。

「似て居るく、仍且兄弟だからな」

慙う思つた時睦子はふいと顔を上げた。

「あら私大變だわ、假睡をしちやつて」と彼女は狼狽へて言ふ。

「可いよ、眠つて下さい」と克巳は言つた。

「何か御用だつたんでせう」

「あゝ喉が渴いたから」

「睦子は直ぐ吸香を取つて克巳の口に當てた、一口飲んで克巳は言つた。

「睦さん、明日からね、家へ歸つても可いよ」

「どうして？」と睦子は愕然として言つた。

「僕はもう大丈夫だから」

「いゝえ、まだくですわ」

「併し君にも氣の毒だからね」

「氣の毒だつて仰有るの？」と睦子は怨めしさうに眼を舉げて「私ね、いつまでも此處に居ますわ」

「難有う」と克巳は言つた、而して深い呼吸を吐いた。

八

不具にもならず痴呆にもならず漸次恢復に向つたので蝶子を初めとして櫻井、橋本は無論の

事、野球に興味を持つ満都の學生が、悉く愁の眉を開いた。併し退院には未だ一と月も費らなければならぬ。其れが何人よりも茂平の心配する處であつた。

一週間目毎には病院の支拂をせねばならぬ規定である。茂平は毎も其の日が來ると金を懐にしてやつて來る、而して黙つて金包を睦子に渡して行くのであつた。三週間目には時刻が後れて夕方となつた。四週間目には翌日となつた。其日は雨が降つて一日鬱陶しかつた。睦子は來るべき筈の茂平が來ぬので若しや病氣でもあらうかと心配した、が其の日の午後彼はのそりと入つて來た。全身雨に濡れて汚ない筒袖の上に黒いほろ／＼の外套を着て居る。

「晩くなつて濟みません」と彼は懐から金包を出し凝と其れを見詰めながら「三圓ばかり足りないかも知れませんが」と小聲で言ふ。

「可いわ、足りないのは私が什麼かしますから」と睦子は言つた。茂平は深い皺に刻まれた眼を瞬たいて深い呼吸を漏らし「未だく退院が出來なかつてよ」

「もう半月ばかり経たら温泉へ行けとお醫者さんが仰有やつてよ」もう半月……其れから温泉……と茂平は呟やいたが聽て「お先祖様が助けて下さるだと言ひ捨て、室を出た。睦子は金包

を解いた、と見ると毎もは紙幣だけであつたが、今日は銀貨紙幣取り交せて其の上に汚ない銅貨……中には五厘錢……などまで雜つてある。睦子は思はずはつと胸を轟かした。

「お錢が無いのだ」

彼女は金包を片手に持たまゝ殆んど身動もしなかつた。私は何故今までは是に氣が附かなかつたのだらう。可愛さうに爺やが獨りで心を痛めて居るんだ。若し私が森川さんの妻であつたら私が第一に此の事を考へなきやならないのだ。

彼女は直ぐ茂平の後を追ふた、耗びた下駄を穿いて破れ傘を差し、泥濘の中をびしょく歩いてる姿が並木路に見える。

「爺やさん」と彼女は呼び止めて漸と近附いた。

「爺やさん、お金の都合が悪いのぢやなくつて？」

茂平はしみ／＼と睦子の顔を眺めやつて靜かに首肯き「だけんど、坊ちゃんにもお嬢ちゃんにも言ふ事なんねえぞ、心配するからのう」

「可いわ、私引受けるから安心してね」

茂平の眼から大きな涙がほろほろ零れた。而して何んにも言はずにさつさと歩き出した。睦子は室へ入つて物と息を吐いた。私が引受けると言つたものの此の將來の病院費や温泉行を什麼しよう。母子三人で其の日暮らしをして来た自分達には十圓の貯蓄すらないのである。だが要るだけのお金は什麼にかしなきやならない、櫻井さんは大阪の富豪の息子さんだから相談すれば何とかなるだらうが、併



し森川さんの事は一切私だけの手で引受けたい。

睦子は又しても新たな心配が出て来た。

「たつた三百圓ばかりのお金があれば病院も温泉も済むんだ」

彼女は毎日其れを繰返した。

「三百圓！三百圓！」

で彼女は折を見て早稲田の家へ歸つた、彼女は先づ箆笥を開いて自分の着物や帯を取出した、其れから手函の指環、襟留、帶締、凡てを前に並べて胸算用した、元價で漸と三百圓のものが什麼して半價にも賣れよう、彼女は情けなくなつて幾度もく着類を疊んでは擴け擴けては疊みつした。

「まあ何をしてるの？」と母は不思議相に睦子を見やりながら言つた。

「いゝえ何でもないのよ」

母は黙つて立た、而して自分の着物を凡て取出した。

「これも一緒にしておやり」

「お母さん」と睦子は驚いて母の顔を見詰めた。
「森川さんのためなら什麼事でもしてあげなきやなりません、其れがお前の義務ですよ」と母は静かに言つた。睦子は刷と顔を染めた。

九

金には限りがあるが費用には限りがない、睦子母子の苦心の金も次第に残り少なくなつて来た。此の按配では退院の頃には一文もなくなる。睦子は其れのみ案じながら其日々々を送つた。人に言ふべき事でなし、言つたとて却つて人々に心配させるだけの事、彼女は一方に克己の恢復の喜祝があると共に一方に恰ら熱湯を飲む様な苦みがあつた。

「あと三日で勘定日だ、二日になつた、もう一日だ」
退院の日と勘定の日と同日である。祝ふべき日と血の出る様な涙の日と同日である。蝶子は明日は退院といふので兄の居室を掃除するやら皆を請待して夕飯の御馳走をする獻立やらに喜

悦いつぱいの胸を轟かして病院と自宅の間を二度も三度も往復した。櫻井や橋本其他の友人達も待ち兼ねた様に病院へ押寄せて萬歳々々を浴びせ掛けた。人々の喜ぶ顔を見るにつけて睦子の胸は苦しい。

「どうして明日の勘定を済まさう、そして温泉へやる事が出来るだらう」

彼女は自分の箆笥が空虚で母までが着替さへ無くなつた今日、百圓と纏まつた金の出来るべき筈がないと覺悟して居る、其れでありながら矢張「どうかならないものかしらん」と焦り出す。彼女は黙つて窓際に立つて居た。

「今日中に調べて置かなければならない」

彼女の苦心は知る由もない、克己の寢臺の周圍に屈強の青年達が盛んに煙草の煙を漲らして歡聲笑語湧くが如くである。

「随分蝶ちゃんにも心配さしたね」と櫻井は蝶子を膝の上に載せて「其代りに明日何か好きなものを兄さんに買つて貰ふさ」

「えい買て戴くわ、此那時でなきや何も買て下さらないんだもの、ねえ兄さん」と蝶子は狎へ

る様に兄の顔を見上げる、兄は悠々と微笑して「うむ何でも買ってやるよ、焼芋でも餡パンでも」
「あら其那ものは不要いわ」

「ぢや何だ」

「あのね」と蝶子はぱつちりした眼を開いて何か言はうとしたが躑躅で両手を顔に當て、肩を揺つた。

「何だ〜」と二三人の聲が起る。

「言へないわ」

「ぢや僕にだけ聞かしてくれ」と櫻井は蝶子の頬に耳を寄せる。

「あのね」と蝶子は眼をくるくると一同に廻はして見せて小聲で囁やいた。

「うむ、成程、うむ、なある程」と櫻井はにこ〜として首肯き、

「ほう、まだあるのかへ、なる程うむ、袴に草履に西洋人形」

「あら言ちや厭よ」と蝶子は顔を隠した。一同は喝采した。

「可しつ皆な買ってやるよ」と克巳は言つた。睦子は黙つて此の模様を見て居た。

「何んにも知らずに袴と草履と人形を請つて被居しやる、兄さんの病氣祝だから請られなくとも私が買って進けなきやならないのだ」

「怒う思ふと情なさが充滿になつて堰き来る涙を喉元で漸と抑へた。今は一文も目的がない、貯金が二十圓餘りあつたのが其れも引出して残るのは只つた二圓である。百圓に對する二圓では什麼する事も出来ない。」

「怒ういふ時は萬龜さんが居てくれたら什麼に力になるか知れないのに、其の萬龜さんさへ今では何のためか音信不通になつて居るのだから仕方がない」

此の時彼女の頭に閃めいたものがある。萬龜さん！萬龜さん！と彼女は繰返した。

「爾だ九死一生の場合だから他の事は考へて居られない、萬龜さんに頼みませう、それで不可かつたら御父様に……」

溺るゝものは塵でも掴む、睦子は今に萬龜子の事を想ひ出すと共に是が最上の方法であつて
今まで何故此處に考へが及ばなかつたを怪んだ。萬龜さんなら屹度何とかして呉れるだらう。

彼女は暗雲の中に日の光を認められた様に胸を跳らした。彼女は直ぐ室を出た。

「何處へ被居やるの？」と蝶子は言つた。

「貴方のねお人形を買ひに」と睦子は冗談らしく言つて「皆さんよろしく御頼みしてよ」

彼女は入口を出て門に向つた、門へ行くには病室の窓の下を通るのが徑路である。窓から濛

濛たる煙草の煙と話聲が漏れて居た。

「あの人達は今に驚くだらう、私と克巳さんの結婚の日に什麼な騒ぎをするだらう」

彼女は恚ういふ擦つたひ思ひに微笑した、而して足を早めた、父の家は築地の一丁目にある

彼女は電車を降りて眞直に父の門内に入らうとした。廣い敷砂の門内に今ま自動車が一臺タイ

ヤに空氣を入れてある。彼女は勝手口から案内を請ふた。

「少々お待ち下さい」と女中は紡績紺の袷にメリンスの帯をしめた睦子を見やりながら奥へ入

つたが廳で出て来て、

「どうぞ此方へ」

睦子は今までの恨みも何も忘れて久し振で妹の顔を見る事が出来ると思ひ金の工面も是で首

尾能く出来ると思ひ、只だ嬉しさにそわ／＼しながら女中の後に従いた。そして萬龜子の居室は

什麼に立派だらう杯と想像した。が、この想像は直ぐと外れた。彼女の通されたのは洋風の應

接室であつた。

「御客様ですか」と睦子は訊ねた。

「いゝえ只今御稽古で」と言ひ捨て、女中が去つた。御稽古だつて何だつて肉親の姉だから居室へ

通さない筈が無のにと彼女は思つた、彼女は一時も早く妹の愛らしい顔が見たかつたのである。

十分は過ぎた、二十分は過ぎた、三十分を経てとも萬龜子は出て来ない、彼女は段々不安に

なつて来た。

「どうしたんだらう、餘り酷い」

今まで思はなかつた事が俄然として彼女の頭に浮んで来た。

「爾だ、二度と来て下さるなと言はれたのだつけ」

彼女は悚然として今日此處に來た事の不覺であるのに氣が付いた。

「馬鹿にされに來た様なものだ、歸りませう」

彼女は扉に手を掛けようとした途端に父の姿が見えた。

「何しに來た」と父は叱る様に言つた。

「萬龜さんに逢ひたいと思ひまして」

「お前は約束に背いた人間だ、此の家へ來る事はならん、萬龜も逢ひたくないと言つてるからお歸り」

「はい」と睦子は頭が上がりなかつた、彼女はちらと父の顔を見た時「あゝ來るんぢやなかつたお母さんに濟まない」と思つた。

悄然として勝手口から出る時、流石に耗びた下駄が恥かしかつた。廣庭では今ま自動車音が音を立てゝ居た。彼女は腰を屈めて自動車の横を抜けようとした刹那！玄關に現れたのは萬龜子の盛裝した姿であつた。

「あら！」睦子は進み寄らうとした。萬龜子もあつと驚いて聲を擧げた様に見えたが直ぐ車

の中に姿が隠れてしまつた。ぶう／＼と車は鳴つた。而してする／＼と敷砂の前に半圓を描いて滑らかに門を出た。玄關の式臺に三人の女中が手を並べて御辭儀をして居る。睦子は逃る様に門を出た。

— 11 —

門を出て彼女は吻と息を吐いた。

「もう來るものか、決して／＼二度と來ない」と彼女は口の中で叫んだ。母と姉娘は身の皮を剥いても百圓の金に困つて居る、父と妹娘は寶玉と綺羅とに飽いて居る。恚ういふ一家族が世にあらうか。生れてから二十三年、一緒に育ち一緒に泣きつ笑ひつしたものが、富豪になればとて掌を返す様に姉を姉とも思はぬとは餘りに酷い。

「もう／＼姉でもなければ妹でもない、自動車に乗た妹と、耗び下駄を穿いた私と、どつちが眞の人間か今に解らして見せませう」

彼女は暫らく父の邸宅を覗んだが、廳で頭を低れて凝と下唇を嚙んだ。刻一刻に迫るは明日の勘定である。さあ其れを什麼しようか蝶子さんにも人形を買てやると約束した、お金が出来なければ病院へは歸れない。彼女は何といふ考へもなしに電車に乗った。いつの間にか乗替へた。而して又思案に耽つた、不圖氣が付くと電車は神樂坂の上に差掛つて居る。彼女は其處で降りた。

「家へ歸つてお母さんに相談しようか、但しは爺やに……」

二つとも不可いと彼女は思つた。

「兎も角も郵便局へ行て此の貯金でも受取つて置かう、たつた二圓でも何かの足にはなるだらう」

彼女は牛込郵便局へ入つた、局は多勢の人が居た。貯金の口には五六人の頭が集まつて居た。何れもく預ける人ばかりで曳出す人はない、小さな丁稚が自轉車に乗つて来た。而して嬉しさうに口笛を吹きながら襦袢の衣匠から五圓の紙幣二枚を出して預けて行つた陸子は恥かしかつた。

「二圓不残は不可せんと」と係員は鐵網の中から言つた。「いくらか残して置きませんか」と

「はい」

「いくら残します」

「よろしき様に」

「よろしき様では困りますな、私のものでありませんから」

「では……あのう……」

「いくら？」

「五十錢」

「五十錢、よろしい、では一圓五十錢ですな」

箆の中に三枚の銀貨をがちやんと入れて更らにもう一度數へ直し「一圓五十錢？」と高聲に言つた。陸子は恥かしさに消えも入りたく思つた。彼女は夢中に箆を攫んだ。

「箆を持って行ちや困ります」と係員は笑ひながら言つた。「では帳面を直しますから待て下さい」陸子は銀貨を財布に入れて帯に挟み腰掛に腰を下した。

「六十三番」と爲替係が叫んだ。
「おう」と太い聲が聞えて向ふの隅から背丈は低い米俵の様に丸く肥つた五十恰好の男が出た。

「いくら？」

「八百五十圓」と男は言つた。而して箆の中から紙幣を取て手早く數へた、新しい紙幣がばらばらと氣持能く男の指先に跳る。

「あゝお金といふものはある處にはあるものだ」と彼女は羨やましく思つた。と此方の係員が呼ぶ。

「油谷睦子さん」

「はい」

夢から覺めた様に彼女は立上つた、而して貯金帳を持つや否や扉を出た。と彼の肥つた男は自分の先に立つて帽子を前のめりに被りながら歩いて行くのを見た。

「八百五十圓！」彼女は肚の中で繰返した。

「八百五十圓！其の半分もあつたら……」

— — —

藍色の薄羅紗の外套を着て、中折帽を被り裾を端折つたと見えて外套の下から縞子の股引と赤皮の靴が見える、煙草を持つた手を動かす度にダイヤの指環が光る。

「請負師だらう」と睦子は思つた、而して再び八百五十圓！と繰返した。此の人達には八百圓や千圓の金は塵の様に見えるだらう、飲んだり食つたり賭博をするや一夜の中に消えてしまふ、だが其の八分の一あれば此に未來に立派な世の中の仕事をやる青年が助かるのだ世の中は何麼して憊う無駄な人にお金があるのだらう。

彼女は殆んど魅入られた様に男の袂や懐の方を見やりながら空想に驅られた。今ま憊うして此の路を歩いてるあの人の懐に八百五十圓ある、して見ると向ふから来た人にも亦た百圓や二百圓あるかも知れない、此の店の主人も彼の八百屋も米屋も魚屋も……皆んな此處を歩い

てる人は必ず幾許か持て居る、一圓五十銭しか持て居ないものは私だけだ、而して什麼しても百圓の金を調へなければ生きて居られない破目になつてるのも私だけだ。此れだけ数多い人の中で私ほど苦しい思をしてるものは一人もなからう。

「八百五十圓！」と彼女は又もや獨りで言つて溜息を吐いた。男はふいと背後を向いた。此の時睦子は何時の間にか江戸川畔に出たのに氣が付いた。

「あら什麼したんでせう」

自分で自分の迂濶を嘲る様に立止まつて病院へ行かうか、家へ行かうかに迷うた。と肥つた男は再び背後を向いてすたくくと近寄つて来た。

「姐さん……奥さんかも……お前さん何か心配がありなさるね」

朴訥で荒つっぽい聲であるが、優しいさうな聲に睦子は思はず引込まれた。

「はい……いゝえ」

「いや爾だらう、お前さんは屹度身に餘る心配事がある、短氣な考へを出してらぢやねえか」

「いゝえ爾那事」と睦子は耳根を染めた。

「若えから思ひ詰めるてえ事もあるだらうが、多寡が金の事ぢやねえか、ねえ奥さん、いや御嬢さんかも知れねえが、はッくくまあね、お嬢さん、金の事だらう、爾だらう」

「はい」と睦子は釣り込まれて答へた。

「爾だ、俺の眼に間違が無え、何たらう御嬢さん、金の事なら金で濟ませるが可いぢやねえか、いくらだか知らねえが俺が出してあげやうぢやねえか」

「いゝえ私は別に……」と睦子は只不思議さに度を失つて曖昧に言つた。

「可いよ、お前さんは俺が郵便局で受取つたのを見て居たんだ。して見ると俺にはぢやんと金がある、金がありながら難儀な人を見逃すてえのは男と言はれねえからな、爾でせうお嬢さん、惚れた男があつて親達が承知しないでえなら其りや又た其の様に話の仕様もあるしさなあお嬢さん、金で困る位馬鹿けた話はあるもんでねえ、俺には今ま金がある、これが懐にあつても明日が日にや一文もなくなるかも知れねえ、して見りや人助けのために費つてしまふ方が可いんだ」

「御親切に難有うございますが、でも見ず知らずの人様からお金を貸して頂くわけがございま

せんから」と睦子は辛と言つた。

「貸すんぢやねえぜお嬢さん、俺が此に打捨るんだ、それをお前さん拾つて使へば可いんだ、はッくくく」

「でも私は……」

「まあ俺と一緒にしてお出でなさい、此處で言ひ合つて居ちや人立がするから」

二二三

親方風の男は直ぐに通りすがりの車夫を呼止めて何やら言つた。睦子は拒む勇氣も出なかつた。二臺の車は三月の春風を切て走つた。

「あゝ是で助かるのだ」と彼女は車の上で思つた。「世の中には恚ういふ事があるものだ、見識らずの人が生命を助けるなんて至で小説にある様な事だ」

夢かと思へば夢でない、肥つた男の肩から上が車の上に見える。車は道灌山の大きな門内を

入つた。

「被来しやい」と玄關口に女中の二三人が現はれた。

「どつか静な處が空いてるかね」と男が言ふ。

「どうぞ此方へ」

案内したのは奥二階の六疊である、幾つもの廊下や押戸を通つて最後の戸を押すと日暮里の田圃は一望の下に見下される、其處は此の家の一番奥の室である事が解つた。

「快い見晴だ」と男は外套を脱いで欄干から下を眺めて言つた。「丁度下は汽路だ」

睦子も黙つて下を見やつた、いかにも此二階は崖の端に建てたものでほんの眞下は何十丈とも知れぬ石垣である、其下を通る汽車は全然珍具位の小さく見える。

「地所を儉約しやがるもんだから此那危ねえ處にまで建てたんだ」と男は笑つた。睦子は鬨に引着く様に坐つて、女中等が酒や肴を運ぶのをもどかしく思ひながら見て居た。

「可しく用がある時には呼ぶからな」と男は言つた。

「畏まりました」

女中が去た時睦子は突然恐怖に襲はれた、其れは何といふ事なしの淋しさであつた。
「まあ一杯やりませう」と男は言つた。

「私は頂けませんから」

「あゝ爾ですか、ぢや何かお食いなさい」

男は依然優しい快活な聲で言つた。

「はい、でも私……もう日暮れになりますから」

「あゝ其れも爾だ、ぢや早く御飯を食べてね」

「御飯も頂きたくはありませんから」

「爾ですか、いや御道理で」と男はにこ／＼しながら「併し能く私の言ふ事を聴て下すつた。私は此那請負の様な事をやつてるもので石政と言へば仲間だけにや名前を知られてるものですがね、なにしろね之が性分とでも言ふんですかね、人の難儀を見ると黙つて居られねえんでね、その爲に詰まらねえ目に逢ふ事もありますよ、お前さんの事もね、今此で什麼な事情が什麼いふ紛糾になつてるかなんて事は聞きますまい、聞いたつて仕様の無え事だからね、只



だ金でお前さんの生命が助かるてえなら、金は天下の廻り持だなあお嬢さん、私の持つてるものをお前さんが遣ふのも私が遣ふのも同じ事だからな……處で金は幾許要るんですか」

「あのう……」

と睦子はもぢくして顔を火の様に赧くなし「百……圓……ばかり」

「百圓？」と問ひ返して男ははッくくとして笑つた。「百圓それんばちで苦勞しなすつたか」と急に眞面目になり「いや金てえ奴あ無え時にや一錢銅貨も無くなる時があるもんだから……可愛さうに苦勞しなすつたか」

恚う言つて彼は懐から紙幣束を出し、其れを鼻紙に包んで前に抛け出した。

「二百圓あるから持つて御出なさい」

「はい、では御言葉に狎へまして拜借致します、私の宅は早稻田の運動場の前の牛乳ホールで睦と申しますものでございます、何れ片附き次第御禮に伺ひます」

睦子は金包を戴いて帶の間に確乎と入れ。

「では之れで失禮致します」

「あゝく急ぐだらうからね」と男は盃を取上げて立ちかける睦子を見やり。

「だがね、忘れものはありませんかね」

「いゝえ何も」

「いやあるだらう、一寸お待ちなさい」といふ男の聲は改まつた。

一四

睦子は不思議さうに立ちかけた腰を落して坐つた。

「別に忘れものは……」

「いやある筈だ、ねえ御嬢さん、私は何も恩に着せるといふ譯でもねえが、お前さんは學校へ行きなすつた方だなあ、お嬢さん、人の世話になつて御禮もしないで此儘歸りなすつちやお前さんは心苦しからうと思ふのだ、可いか、私は什麼でも可いんだ、お前さんが氣が濟むめえ、

只だ爾思ふのだよ」

「御禮は何れ屹度御伺ひ致しますから」と睦子は徐々潮しくる不安に胸を轟かしながら兩手を突いて言つた。

「何れお宅へ何うて？」と男は飽までも和らかな相好を崩さずに言つた。「私に宅が無かつたら

什麼しなざる、伺ひたくても伺へないぢやないかね、だから私は言ふんだ御禮をするなら今の中だ、解つたかねお嬢さん」

「今の中に？」と睦子は合點ゆかぬ様に眼をぱちくり動かして途方に暮れた。男は突と立上つた。其の太い腕で彼女の首に絡み付くと酒臭い呼吸が鼻を撲つた。

「何をなさるんです」と睦子は男の腕を拂ふ様にして叫んだ。

「俺の妾になつてくれ」と男は言つた。

「貴郎は何を……何を……お金で以て……」と睦子は途切れ々に叫びながら男の腕を漸と潜り抜け「お金をお返し、ます、お返し、ます、失敬な」

「すべた！黙つてろい」と男は眞直に立た、今までの和らかな地蔵顔が酒の氣と血の氣を帯びた悪鬼の様に變つた、彼はどろりとした眼を睦子に向けて下唇を二三度噛みしめたかと思ふと膳の上を一足飛びに睦子の胸を掴まうとした。

「誰か来て下さい、誰か」と睦子は悲鳴を擧げて逃げ廻つた。

「誰も来やしない、爾吩咐けて置いたんだから」

睦子は男の手を潜つて椽側へ出た、椽の盡きたる處は押戸である、此の戸を出づれば最早安全だと彼女は思つた。

が押戸は開かなかつた、一度二度彼女は曳手を引いた。けれども戸は釘付にされた如く動かない、彼女は身を翻して欄干から跳び降りるより仕方が無い。此儘節操を汚されるよりも寧ろ死ぬ方が可いと彼女は決心した。此の決心はほんの瞬間であつた。男の腕が彼女の首筋に掛ると彼女はする／＼と曳きずられた。

「御免なさい」と彼女は言つた。「お金は御返し申します」

「何も言ふ事はない」

男は欄干に掴まつた睦子の手を挽ぎ放さうとした、放されまいと睦子は横木を抱く様に獅噛み付いたまゝ一生懸命の力を出した。放さうとする、放れまいとする劣情に渴して猛獸の如くに猛り立た男の力と、節操を守つて生命を的に争ふ女の力！二つの力が相争ふ機會に欄干はめり／＼と音した。はつと思つて手を離す途端に男の兩腕は彼を待つて居た。

「何をするんです」

睦子は満身に力を籠めて男の胸を突いた、男はよろ／＼と背後に倒れた。と睦子の眼には何んにも見えなくなつて、遙かの田圃や森がほんの眼の先でぐる／＼廻つてる様に思はれた、倒れた筈の男の姿が見えない。と見ると欄干の一方があたりと外れて下に垂れて居る。睦子は下を見やつた、崖の上は残る日影に明るい、崖の下は既に暗くなつて居る、其の薄暗のどん底に人間が倒れて居る。

「落ちた」と睦子は思つた。どん底に倒れた人間は手と足をばたく／＼と一二度動かした、而して起き上りさうにしたが又た倒れた。彼女は悚然として押戸を引いた、押しても開かなかつた戸は引くと直ぐに開いた。彼女は裏梯子から降りた、而して庭木戸から竊と町へ出た。町は灯が點つて居た。夕闇の賑やかな灯の下を忙がしさうに人々が歩いて行く。

一五

睦子は車に乗る事も電車に乗る事も忘れて只真直に歩き續けた。例令ば夢の中で妖怪に追ひ

驅けられて氣ばかり焦つても身體が動かぬ様な苦しい氣持で何處までも真直に歩いた。もう大丈夫が知ら、あの男が背後から來はしないか知ら、彼女の恐怖は只是だけであつた。だが、彼女は漸と本郷の赤門前に來た、而して宏莊な大學の建物が夜の闇に聳え立てる影を見た時に彼女は初めて吾に復つた。

「皆さんが待てるだらう」

彼女は思はず帯の間を探つた、石政といふ男から貰つた二百圓の紙幣が紙に包んだまゝ其儘に帯に挟まつて居た、彼女は愕然として其れをちらと見やつたまゝ元の如く帯に挟んだ、何とはなしに全身が顫へ出して齒の根が合はぬ様に動く。

「什麼して此のお金が此にあるんだらう」

彼女は路の隅に立て兩手を帯に入れたまゝ首を低れて前後の光景を考へた。郵便局の前から江戸川畔、其れから車に乗る、料理屋へ行く。男から金を渡された、其れから……。

其れから後は極めて朦朧となつた、彼女は只一瞬間に男を突いた時の手應を知て居た、大きな重たい柔かな様な堅い様な或る物體を力を極めて突いた時の心持！而して次の一瞬間に男の

姿が見えなくなつて遠くの青い田圃がぐる／＼目の前で廻つたかと思ふと、薄暗い崖の下で男が起上らうとして又倒れ奇妙な聲で唸つた時の心持！

順序なしに種々な光景がぱつと眼前に出たかと思ふと又消えて其の次に又々出て来る。

「私はあの男を殺したのだ」

慙う思ふと突き飛ばした時に自分の手先と男の胸と觸れた其の體温が未だ手先に残つてるかの様！彼女は両手を帯から出して振つて見た。

彼女の此時の心持は殆ど混亂の極に達した、例へば彼女の持つて居る感情や意識や微細な神経が假りに十種あるものとすれば其十種のもが一つの意識の中に働くのでなくて悉く一つ／＼が假りに十種あるものとすれば其十種のもが一つの意識の中に働くのでなくて悉く一つ／＼が假りに十種あるものとすれば其十種のもが一つの意識の中に働くのでなくて悉く一つ／＼が假りに十種あるものとすれば其十種のもが一つの意識の中に働くのでなくて悉く一つ／＼

勝手放題に別々に働いて居たのであつた、眼は何物かを見て耳は別なものを聞き頭は全く異つた事を考へる。彼女は石政を殺した事を考へて居る積であつた。が彼女は病院の事も考へて居るのである、其れから築地で妹が自動車に乗つたのを見た事も考へて居る二百圓の金が帯の中にある事も考へて居る。理窟から言へば石政を殺した事と二百圓の金とは密接な關係があると思ふべき筈である。だが睦子は石政と金とは全然無關係なものゝ様に思へた。いつの間にか石



政が二階から落ちて死んだ。只其れだけである。

「あら姉さん、あら」

電車からどや／＼人が降りる中に蝶子の聲が聞えて、荒い鈴仙飛白の長い袂がひらりと自分の方に動いたと思つた。

「随分探してよ」

「まあ蝶子さん」と睦子は漸と明るみへ出た様に嬉しうに言つた。

「姉さんが出たきり御歸りにならないもんだから兄さんや櫻井さんも淋しがつて……私お迎に行たのよ、だけれども解らないんですもの、何處へ被行したの？」

「私ね、貴方の御人形を買はうと思つて……」と睦子は不意に言つた。

「あら嬉しいわ」と蝶子は嫣然して「だけれども私……気の毒だわ」

「いゝえ気の毒な事はありませんわ、お金は爺やから澤山預かつてあるんですから」

二人は明るい片側へ出た、而して大きな西洋人形と羅紗裏の草履と袴とを買った。

「あら可いわねえ、あゝ嬉しい嬉しい」と蝶子は草履と袴を睦子に持つて貰ひ、自分は人形を箱から出して兩袖を掻き合せて胸の處に確乎と當てがひながら歩いた。

「是で決まつた、是でもうあのお金に手が付いたのだから」と睦子は我が勇氣を確かめながら自分に向つて自分で言つた。

一六

其の夜の夢は案外靜かであつた。彼女は曉方に眼が覺めた、快よい克巳の鼾が聞える、彼女は自分ながら氣が落ちてゐるのを喜んだ。

「もう今日は退院だ」

「あつた」と昨日の事は既に遠い過去となつてしまつた。

「あの男が悪いのだから決して私には罪がない、お金だつてもあの男が私に貸してくれたのだから盗賊ではない」

彼女は幾度もくく、慙う繰返した。克巳は何時までも眠つて居る。無論退院の手續をするには未だ時間が早い。

「行て見よう」と彼女は不圖昨日の事を又た考へ出した。「死んだか生きたか解らない」

彼女は其の日の新聞を擴げた、道灌山の崖下で男が死んで居たといふ記事を探したが、何んにも掲てなかつた。彼女は霎時考へてふいと病室を出た。最初は吾ながら大膽であると思つたが電車に乗てから極めて平氣になつた。郊外線の電車に乗て日暮里から田端の間の線路を電車の窓から隈なく注意した、昨日の料理屋の二階が雨戸を閉めた儘高い崖の上に見える、毀れた欄干は何の名残もなく元の形になつて居る、が石垣の下は春の草が亂雑に亂れて人の足痕や、血の色の様な泥の様な汁に浸されて居る、が屍骸らしいものは一つもない。

「屍骸が形付けられたんだ」と彼女は悚然した、而して彼女は次の電車に乗て病院へ歸つた、

克巳は未だ眠つて居た、其の男らしい顔に微笑むかの如き平和な色を湛えて熟睡して居る。彼女は地獄を逃れて極樂へ出た様に吻と息を吐いた。

「私は生きなきやならない」と彼女は斷乎として自分に言つた。「死んだ人は自業自得だ、若し私に罪があるものとすれば神様が私を罰しなさるだらう、戀人のために人を殺したとて其れは私の罪でない、さうしなければならなかつたから仕方のない事だ」

寧ろ死んだといふ事が確かまつたので彼女には確乎した決心と勇氣が出た。而して終には「あんな悪い人は死ぬ方が可いのだ」とも思ひ「私達二人の生命が助かるためには彼那悪い人が犠牲になつても構はない」と思ふ様になつた。彼女の心は次第に明るくなつた、彼女は大意で會計局へ行つた。而して直ぐに勘定を済ました。其れから彼女は種々な手道具や何かの荷造をして居る中に克巳は眼を覺ました。彼女は全く恐怖を脱する事が出来た。

櫻井橋本初め友人に圍まれて克巳は病院を出た。久し振で家へ歸ると蝶子と茂平はお浪と共に綺麗に室内を掃除して待て居た。時は四月の春である、風は暖かく縁側に日が充滿に射込んで、庭の蝶子の作つた花壇に櫻草や堇や嫁菜や薔薇が咲いて居た。障子を明け放して克巳は

蒲團の上に足を投げ出し悠然した氣持で人々と語つた勝手では睦子が人々を款待すべく白い前掛を掛けて煮物が忙がしかつた。

「處で君」と橋本は克巳が他の人々と語つて居る暇に櫻井に向つて言つた。「温泉へ直ぐ行くつもりか」

「爾だ」

「箱根か湯河原か」

「湯河原の方が安い、だが誰か添いて行かなきやね、未だく全快といふんでないから」

「其れや爾だね、蝶ちやんが行くだらう」

「でも蝶ちやんは學期試験だからな、お互だつても爾だらう」

「ぢや睦さんに行つて貰ふさ、店の方は小母さんも居るし我々が手傳つても可い」と橋本が言ふ。

「處が睦さんは什麼だらう、行くものとしても變だからな」

「變ぢやないよ、夫婦になるんだらう」

「さあ其れがね」と櫻井は思案して「行くなら第一に結婚式を擧げてからにする方が可いだら

うと思ふが……」
「無論だね、新婚旅行といふ奴だね」と橋本は珍らしさうに言ふ。
「早く決めやうぢやないか」
「併し森川が何と言ふかね」
「何と言つても構はんさ、君と僕と二人で決めてしまへば可いのだ」

一七

柴垣の外に鶏と雛鳥が遊んで居る。梅の花が鱗の様に散つて一本の桃は蟲々として枝に紅の唇を開きかけて居る春風がさやくと通り過ぎると其處らの藁屑がばさくと動いて躑躅の粉挽場の戸や鶏籠を音させて行く。粉挽場の屋根に蔽つた柳は既に青々と芽を出して枝が揺れる度に静かな日の光を波の様に織り返す。今まで長閑な聲で唄つて居た茂平は何處かへ出て行た様子、積藁の上に敷いた蓆に茂平の煙草入が残つて居る。其處に蝶子は恍惚した眼をし

ながら睦子に髪を結うて貰つて居る。
「もう廂髪にしても可いわ」と睦子は後背に立て櫛を使ひながら言つた。
「いやよ、お下髪の方が可いのよ」と蝶子は押へながら言ふ。
「だつて御下髪にはかすると髪が傷んでよ」
「だつて大人の様で厭だわ」
「ぢやお下髪にね」と睦子は嫣然して蝶子の頬を覗く様になし、
「髪が多いから手に餘りさうよ」
「姉さんは何時湯河原へ被行やるの？」と蝶子は顔を仰向けながら矢張鏡が見たさに下眼で鏡を見る様にして言つた。
「いつだか克巳さんの御都合で」
「行たら早く歸つてね、私淋しいから」
「あゝく直ぐ歸るわ」
「手紙を頂戴ね」

「えい、でも未だ私が行くか行かないか決まらないんですもの」
「どうして」と蝶子は眼を圓くして手に持った組紐を陸子に捧げる様な手付をなし「姉さんが行かなければ誰も従って行く人がないわ」

「でも私では役に立たないんですもの」

「そんな事はないわ」と蝶子は熱心になつて、

「兄さんが可愛さうだから行ってあけて頂戴ね」

陸子は答へなかつた。此の時庭の花壇の前で櫻井と橋本の聲が聞えた。

「来たわ」と蝶子は笑つた。「橋本さんに餡パンを進ると可わ、今朝野球の人から貰つたでせう」

「あゝ、堅くて食べられませんわ」

「橋本さんなら屹度皆な食べるわよ」

「まあ」と二人は笑つた。

柴垣一重を隔て、克巳は縁側に坐つて居る。其の胸の邊が垣枝の隙間から見える。日は暖かに蝶子と陸子の身體を照して名も知らぬ小鳥が啼いては飛び移り移つては又啼く、黄色な蝶々

が二つ隣の方から飛んで来た、一つが高くなると一つも高くなる低くなれば又低くなる、くるくと廻つて互に何事かを囁やくかと思ふと又直ぐ離れて青天の光の中に紛れ植込の縁の前に現はれる、蝶子は忸とそれを見詰めて居たが聴てこくりくと居眠を初めた。

實の妹に別れた陸子は更らに蝶子が可愛くなつた。恰惻で無邪氣で、快活で能く笑ひ能く唄ふのは萬龜子と同じであるが、蝶子は其れよりも無邪氣である、時には大變に大人びた事を話すかと思へば七つ八つの子供の様な事を言ふ。什麼な事があつても悲しい顔をした事がない、而して如何なる場合も人を疑つたり人の悪口を言つた事はない、時には悠ういふ質問を發する事がある。

「姉さん、私は綺麗だ」

「えい、綺麗ですよ」

「爾かも知れないわ、皆なが私を美人だと言つてよ」

これには陸子もお浪も笑はずには居られなかつた。實際蝶子は此の世の「美」のために生れて来たのだらうと陸子は思つた。居眠りする蝶子の頭を軽く和らかに撫りながら陸子は五六年

前の自分の事を回想した。私だつて此の位の年には何の苦勞もなかつた。其れが今まほんの隣く間に此那苦勞の身となつた。彼女は恚那事を思うて居た。と垣の彼方で橋本の熱烈な聲がした。「夫婦になれば可いぢやないか、馬鹿くしい、俺は面倒臭い事は嫌ひだ」
「まあ待てよ、君は疎策で不可よ」と櫻井の朗らかな聲が言つた。睦子はほつと顔を染めた、而して再び櫛を取上げたが其の手は顫へて居た。

一八

克巳は只にこくして二人の顔を見やつて居た。
「一體何の話だよ其れは」と彼は言つた。
「君が湯河原へ行くに就てだね、看護人が要るだらう、其處で睦さんに行つて貰ふより他に人が無いんだ」と櫻井も矢張りにこくしながら克巳の顔を見成つて「睦さんに行つて貰ふに就てはだね、いつその事君と睦さんと結婚して行く方が可いだらうと思ふんだ」



「誰が爾思ふんだね」と克巳は靜かに言つた。
「僕等二人がだ」
「うむ」と克巳は頭を低れたが再び顔を上げて
「どうして其那事を思ふのだ」
「其れが一番可いからだ」と橋本は唸る様に言つた。
克巳は黙つた。「そこで君の考へを聽かなきやならんのだが」と櫻井はバツトの吸殻を庭へ捨て、
「無論僕等は強うるんぢやないが」
「僕が強うるよ」と橋本が言ふ。「困つたなあ」と
克巳は腕を拱んで「一體爾いふ考へを什麼して起したんだ」
「僕等は睦さんが君を愛して居る事を知たからだよ
なあ森川君は今此處で直ぐと決める事が出来んか

も知れんが、君は睦さんの心が解つてるだらう」

「解らん」と克巳は言つた。

「睦さんは君に對して什麼いふ態度を取つたか又什麼いふ親切を盡したか……」

「其れは解つてる」

「解つてるか」

「感謝してるよ」

「どの位の程度まで感謝してるかね」と橋本が言ふ。

「言葉に盡せないさ」

「爾だ、其れでいゝ」と橋本は勇んで「言葉に盡せない、全く其れだ、だが感謝があれば報い
がなければならんね」

「無論だ」と克巳は力を籠めて答へた。

「其の報いを君は什麼するか」

克巳は黙つた、橋本は續ける。

「最も欲する處のものを與へるのは即ち眞の報いだらう、睦さんの最も欲する處は即ち君の嬢
になるにあるんだ」

克巳の顔は見る／＼赤くなつた、而して額から汗がだら／＼流れ出した、彼は何にも言はな
かつた。

「そこで君は睦さんと結婚しなきゃならんだ、君は厭か」

「厭ぢやない」と克巳は初めて口を切つた。

「ぢや結婚するか」

「其れは出来ない」

「なぜだ、君は厭でないと言つたぢやないか」

「厭ぢやないが結婚が出来ないんだ」と克巳は苦しうに言つた。

「僕だつて男だ、睦さんが僕を愛してくれてるなら猶更らの事だ、僕は睦さんが好だ、だが僕
は夫婦にはなれないんだ」

「何故だ」

「僕は人を愛する力がなくなつたのだ、萬龜さんに捨てられてから僕には生活が無くなつたのだ。今ま假りに睦さんと夫婦になつた處で其れは本當の僕の心に燃え立た愛ではない、僕の力も魂も生命も萬龜さんに引抜かれてしまつたんだ。櫻井君、橋本君、もう言つてくれるな、睦さんには氣の毒だが僕は自分の靈を欺く事が出来ない」

「馬鹿な事を言ふな」と橋本は詰つた。「睦さんの親切を感じ人格を信ずれば愛が成立つちやないか、逃げた萬龜さんより睦さんがどれだけ立派だか知れやしない」

「橋本ッ」と克巳は額に手を當て、言つた。「僕は思う思ふのだ、妻を娶るといふ事は勸工場で物を買ふのとは違ふのだ、此方の品が高いから彼方の廉いのにして置かうと言ふ氣で生涯の妻を決められないと思ふ。我々は一つの事業に目的を有て全身を其れに打込む、若し事業が成功しなければ斃れるまでの事だ、成功しないからと言つて途中で目的を變へる様なら初めから目的を立てぬ方が可い生涯を共にする妻を選んだ僕は今更他の女を娶る事が出来ると思ふか」

「待て〜」と橋本は制める様にして「其れでは君は睦さんを殺す様なものだよ、睦さんが君に盡したのも其の目的があつたからぢやないか、君は恩人を殺すのか」

「仕方がない」と克巳は額の汗を拭き、溜息と共に言つた。

「爾だ、仕方がない」と櫻井は言つた。而して轉りと横になつて天を仰ぎながら「皆な苦しむのだな、自然といふ奴の皮肉のために我々が滅茶々にされるんだ」

「俺には什麼しても解らない、睦さんの様な立派な女を何だつて君は……」と橋本は下唇を凝と嚙むだ。

睦子は頭の脳天から棒を突込まれた様に立竦んだ。

「姉さん」と居眠りをして居たと思つた蝶子は向直つて下から睦子の顔を覗いた。其の眼に涙が充滿に湛つて居た。

「何にも言はないでね」と睦子は微に言つた蝶子は立つてひたと睦子の帯に掴まつた。而して顔を其の胸に埋めた。珍らしい鳥が粉白小屋の屋根と柳の間で鳴き出した。春の日は雲に隠れ又二人をばつと照らした。